

仏教伝来パートⅡ

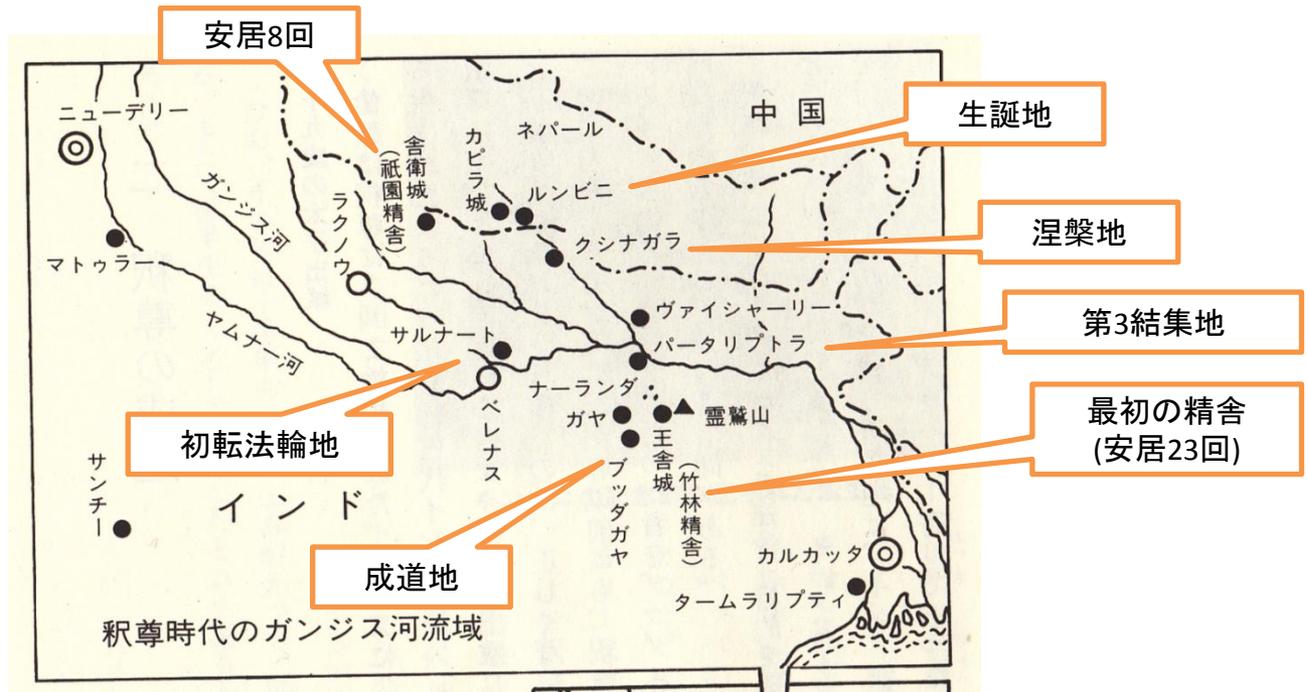
平成25年 6月 4日

昭和40年電子工学科卒

村木 勝司

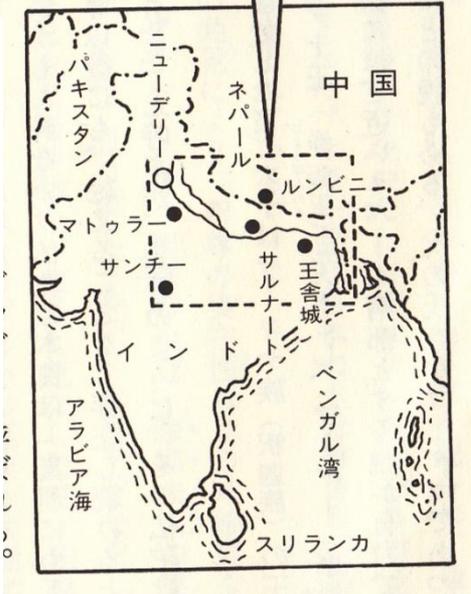
仏教の誕生

- 釈尊の誕生年は諸説。日本ではBC463年説。(仏暦元年は釈尊入滅年、BC383年、末法思想ではBC949年)
- 35歳で悟りを開く。80歳で涅槃。
- 「仏教が誕生」は正しくなく、真理に目覚める。
- 釈尊は形而上学的でなく実践的な問答のみ
- 釈尊の初転法輪は四諦八正道を説いた。
- 精舎は行脚できない雨期の安居として寄進。



釈尊の関係した土地

出典:
「入門仏教史」山野上純夫著
朱鷺書房P22



仏教が全インドへ

- 第1結集{結集=唱和するの意}(入滅4ヵ月後)
- 十大弟子の迦旃延が西インドに布教
- 第2結集(BC300年頃)律の改案否決、根本分裂
- マウリア王朝3代アショーカ王(BC268-233)仏教に帰依。インド各地に石柱や磨崖を建て碑文刻む。ルンビニの石柱碑文で釈尊の实在認められる。
- アショーカ王、スリランカ王の特使を受け王子・王女を派遣し仏教信仰を勧める。
- インドが統一国家であったのは2度しかない。アショーカ王の時とイギリスのヴィクトリア女王の時である(インドの多様さを示す言葉)

アショーカ王時代の マウリヤ王朝

アレキサンダー
大王遠征



チャンドラグプタ
拳兵(初代)

阿育王の
即位

カリンガ

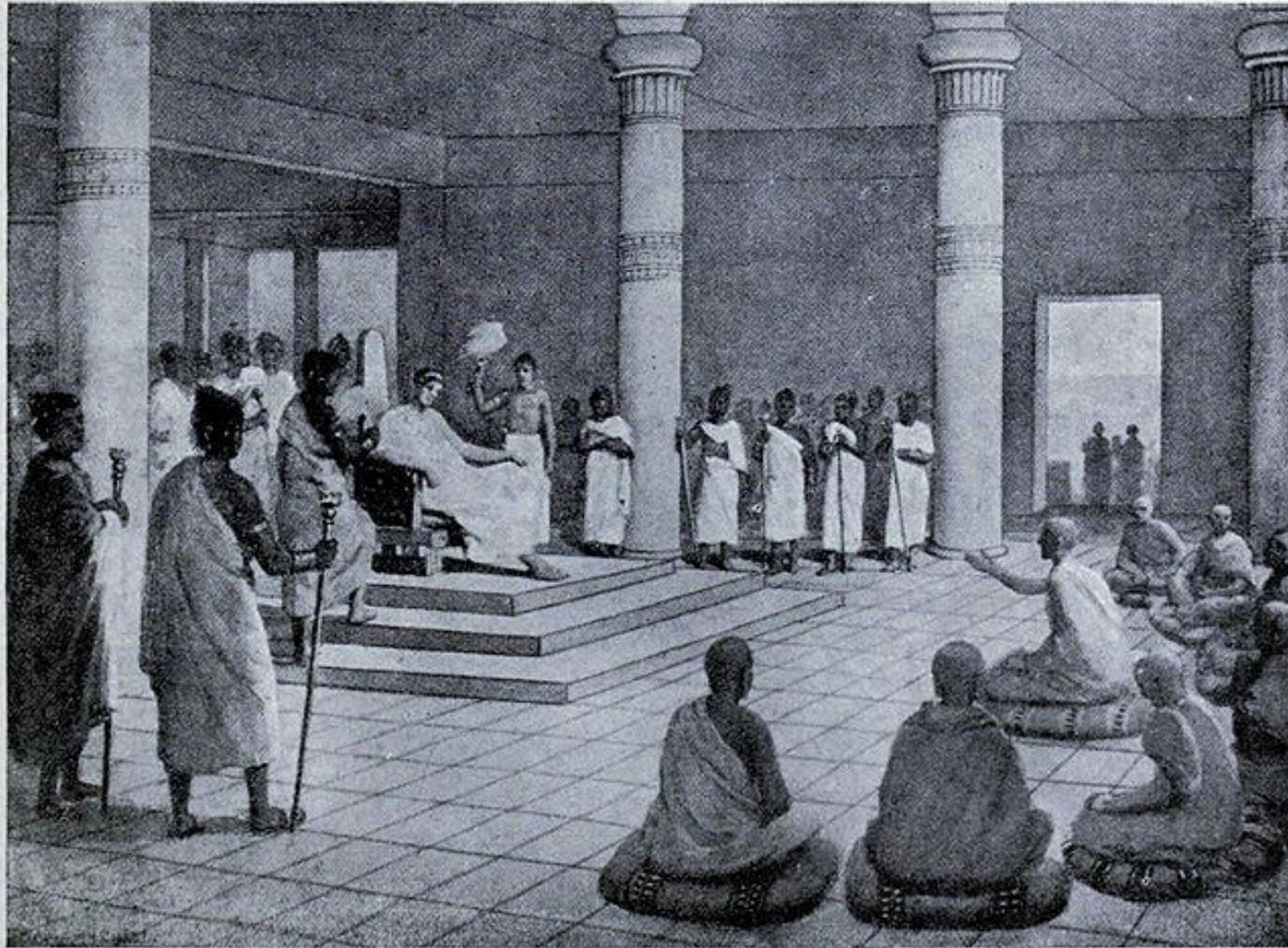
マガダ国の発展を受け
継いだマウリヤ朝。第
3代のアショーカ王は
カリンガ国を征服して
全インドを統一した。

● 主要都市

出典：
イラストでわかる「やさしい仏教」
成美堂出版P72

東西文明の対話

- BC160年頃インド西北部グreek王朝8代ミリンダ王(ギリシャ人)がナーガセーナ比丘に仏教問答。(弥蘭陀王問経、那先比丘経)
- 「西洋的論理」と「東洋的英知」の興味深い対話。東西文明が出あい、互いに触発しあった。
- キリストの12使徒は各地の政治権力から迫害されながら布教、仏教徒は為政者の多くから庇護を受けながら伝教。



Painted specially for this work.]

KING MILINDA ASKS QUESTIONS, 140 B.C.

After the deaths of Seleukos Nikator and Asoka, the great empires they controlled broke up, and on the north-western frontiers of India beyond the Indus the country (Baktria and Parthia) came to be held by rulers of Greek descent. Conspicuous amongst these was Menander of Kabul, who penetrated far into Northern India and created a capital at Sagala (Sialkot in the Panjab). He had strong leanings towards Buddhism, and his religious disputations with the great teacher Nagasena have been preserved in a famous classic, the *Milindapanha*, the Questions of Milinda (Menander).

教えの文字化

- 第3結集 [=唱和の意] (BC200年頃、上座部のみ参加)で初めて経典が文字化。
- 言語は釈尊が話したマガダ語(現パーリ語)。(原始経典と呼ぶ)スリランカに伝えられ、以降南伝仏教として現在も使用されている。
- 現存するパーリ経典：
 - 経集(スッタ・ニパータ)：72の短詩からなる最古の経典
 - 法句経(ダンマパダ)：423の短い韻文詩からなる仏教詩集
 - 本生譚(ジャータカ)：仏陀の前世話、547話あり。

おもなパーリ經典

- 經集 (スッタ・ニパータ)
—七十二の短詩からなる最古の經集。
- 法句經 (ダンマパダ)
—四二三の短い韻文詩からなる仏教詩集。
- ジャータカ (本生譚)
—ブツダの前世話。パーリでは五四七話ある。
- 涅槃經 (大般涅槃經)
—ブツダの最後の旅と入滅を伝える。入滅時に弟子に残した言葉など感動的な長篇。
- ミリンダ王の問い (ナーガセーナ問答集)
—ギリシヤ思想と初期仏教思想の対決を描く。

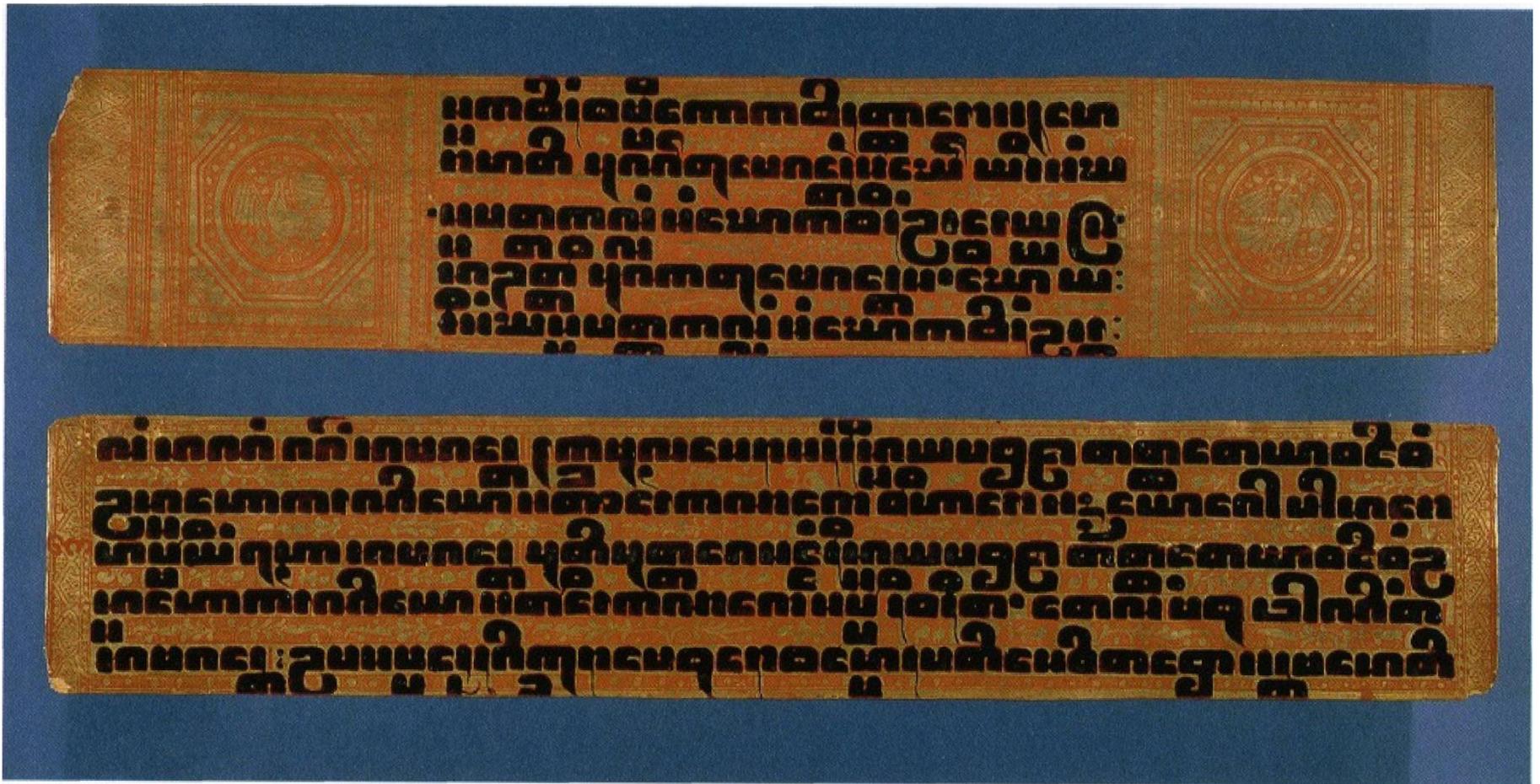
出典：イラストでわかる「やさしい仏教」
成美堂出版P91

おもな大乘經典

- 摩訶般若波羅蜜經 (般若經)
—紀元前後から百年ほどの間に作られた「空」説の經典群總稱。般若は「智慧」、波羅蜜は「完成」の意味。
- 法華經—ブツダは永遠不滅の仏で、様々な教えは人に応じた方便(救済の手段)で、全説は法華經に帰すと説いた。
- 無量壽經—阿彌陀仏が法蔵菩薩と呼ばれる修行時代に四十八項目の本願を立て、極樂浄土を築いた由来を説く。
- 華嚴經—ブツダの悟り、成道の境地を華々しく厳かに描く。微小なものも広大壮大な宇宙・仏と一体と説く。

おもな密教經典

- 大日經・金剛頂經—大日如来が悟りの世界を説く。
- 理趣經—般若理趣經ともいう。男女の恋愛や愛欲も清浄とし、安樂の境地を説く。



7. Ms. Ind. VII, 42.

出典：東洋哲学研究所; <http://www.totetu.org/index.php?id=418>

Pali manuscript of the *Kammavācā*, beginning of the text: ff. 1b–2a.

7. Ms. Ind. VII, 42. パーリ文『羯磨作法』写本, 12葉. フォリオ・サイズ: 54.5×10 cm. 5行本. 17–18世紀の書写. パーリ・スクエア体 (square Pali). 貝葉に樹脂を塗布, ポーティ. 写真は本文冒頭, ff. 1b–2a.

パーリ語：文字順；左から右

材質：貝葉

内容：羯磨作法

上座仏教(いわゆる小乗)

- パーリ語でTheravāda(テーラヴェーダ)「長老たちを通じて連綿と伝承されてきた仏陀の正統派教説」
- 現状：[東南アジア](#)で約1億人。[スリランカ](#);人口の67%、[ミャンマー](#);60%、[タイ](#);95%、[カンボジア](#);85%、ラオス50-60%
- 法句経160 (友松円諦訳)
己こそおのれの寄る辺 己をおきて誰に寄る辺ぞ
よく調べし己こそ まこと得難き寄る辺をぞ得ん
- [救済](#)を目指す者は「よく調べし己」; **釈尊の原点**

「苦」の原因とその救済法

- 原因：存在の構造と人間の誤った認識
- 釈尊は「全ての形成されたもの」=「無常」
- 人間は常住を願い、不変なる我を信じ、執着
結果 渴欲=「煩惱の炎」⇒「苦」が生じる
- 人間が真理を悟れば煩惱の炎は吹き消され
涅槃の境地に入る。
- 初転法輪で説かれた「四諦八正道」がこれである。

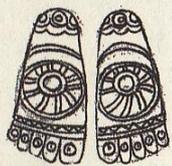
出家と民衆信者

- 八正道の実践⇒一切を棄て家を出て修行要
- 生産活動しない出家(比丘)になる。生活は？
- 上座仏教=「エリート志向の宗教」にも拘わらず何故1億人の上座仏教徒が存在する？
⇒[福田思想](#)
- 日本でお寺へ「墓参り」に行く。
タイでは「[タンブン](#)」(=功德を積む)に行く。
- 托鉢僧に食事を寄進するのもタンブンのため

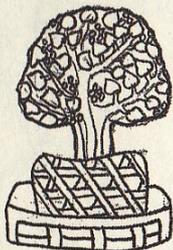
東西文明の融合

- 当初仏陀は菩提樹・法輪・仏足跡・台座などで象徴的に表された。
- クシャーナ朝時代にガンダーラ美術が栄え、人間の形をした仏像がギリシャ彫刻と融合し作成された。
- 同時期にマトゥーラ美術としても仏像を作られている。様式はヒンドゥー的様式。直接的関連性はない。ただクシャーナ朝の2大根拠地。

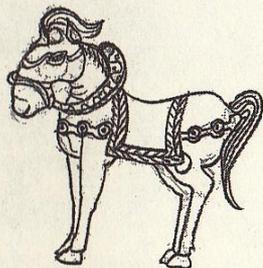
釈尊を象徴的に表現するもの



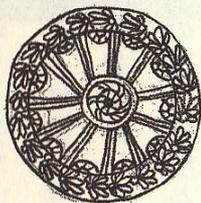
足跡



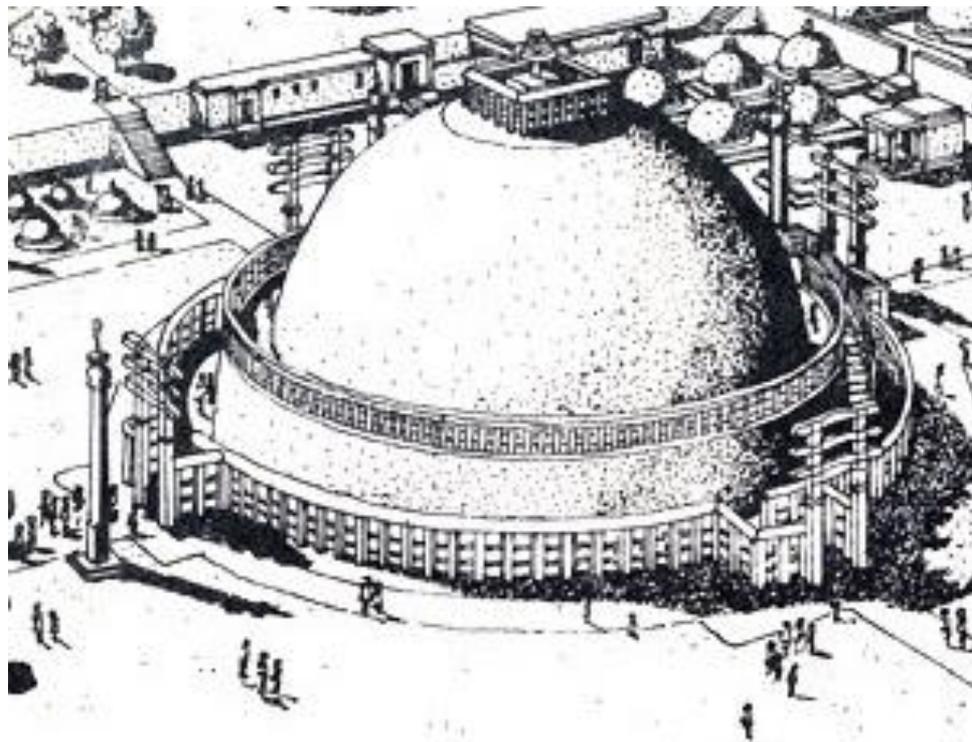
菩提樹



乗り手の
いない馬



車輪



サーンチーのストウーパ
(卒塔婆: 仏舎利を収めた仏塔)

出典: http://www.kamit.jp/02_unesco/01_sanchi/sanchi.htm



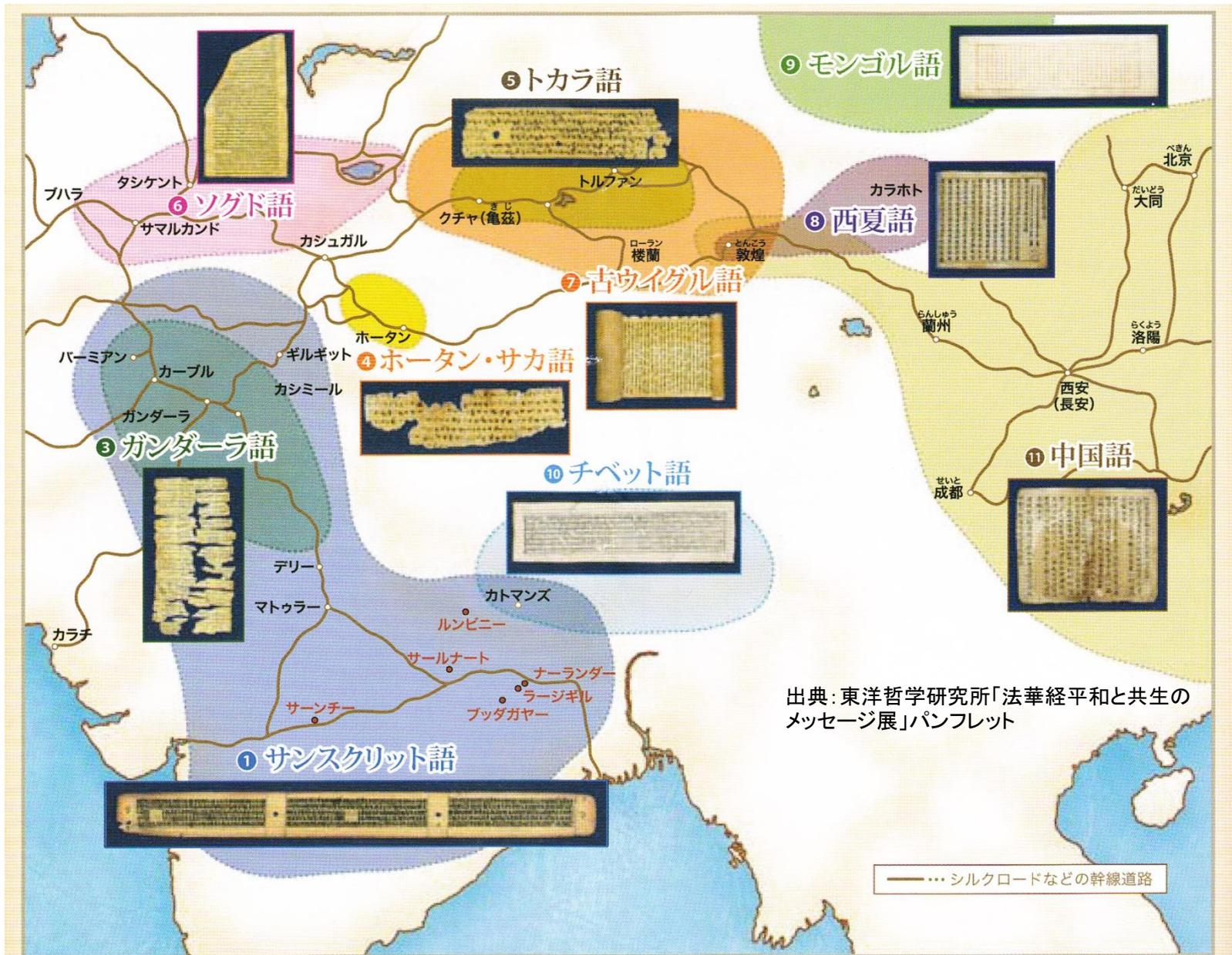
タキシラ美術館

タキシラ美術館の西洋風頭



インドから西域へ

- AD前後、在家中心に「利他行」の原点を追求(大乘化運動)。多くの經典と仏・菩薩誕生。
- 第4結集(AD2世紀)クシャーナ王朝3代カニシカ王の援助、インド北部カシミールで。
経・律・論の三蔵の解釈論を編纂
- カシミールで仏教が盛んになり北伝の機縁
- 仏教が伝搬するにつれて各国の言語に翻訳された經典が作成された



出典：東洋哲学研究所「法華経平和と共生のメッセージ展」パンフレット

シルクロードは「法華経伝来の道」

仏教伝来

西域から中国へ①

- BC138年前漢武帝西域へ將軍を派遣、その後タクラマカン砂漠を横断する交易路できる(シルクロード)
- AD67年インド僧竺法蘭・迦葉摩騰が洛陽に寺院建立
- シルクロードに沿ってキジル千仏洞(AD300-)、ベゼクリタ千仏洞、敦煌莫高窟(AD355-)、炳靈寺石窟(AD420-)、雲崗石窟(AD460-)、龍門石窟(AD494-)が構築される
- パルティア(安息国:イラン)の王子安世高AD148-170(活動期)が中国で小乗仏典の漢訳をし、体系づける。(34部40巻)
- 月氏(クシャーナ朝)出身支婁迦讖AD164-186(活動期)が大乗仏典を漢訳。(13部27巻)
- 中央アジア出身の翻訳者は37人の名前が知られている。

西域から中国へ②

- 鳩摩羅什(344-413)龜茲国出身。384年後涼の捕虜となり武威で401年まで漢語を研鑽。長安で35部294巻を翻訳。羅什以前を古訳、以降玄奘までを旧訳、玄奘以降を新訳と言う
- 当初中国では仏教は儒教・道教と相容れず受け入れられなかった。非漢民族の五胡十六国時代から受け入れられ始め、更に中国国内で偽経(孟蘭盆経・父母恩重経など)が創作され批判を打消していった。

中国での受容と変容

- 仏教の出世間主義と世間的秩序重視の儒家は対立的思想
- 中原は世界の中心という中華思想との相剋
仏教経典ではインドが世界の中心
- 広律の受容と変容。禅宗の「清規」で自給自足生活を規定。仏教は一切の生産活動不可
- 輪廻と神滅・不滅。仏教伝来以来6世紀の間中国古来の神滅論(死と共に精神も滅する)と衝突

中国からインドへの求法

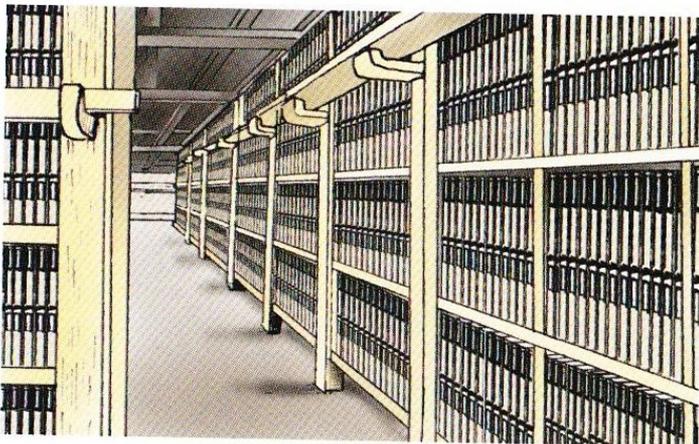
- 中国人で最初に西域へ経典を得に行ったのは朱士行。260年西安から于闐(ホータン市)に行き、「二万五千頌般若経」を入手。
- 法顕は399年60歳代で律蔵を得るためにインドへ。途中鳩摩羅什の居る武威を通らず(治安不安の為)。難行の末インドで3年、帰りは海路。合計14年。その内容は「仏国記」(別名:法顕伝)に表す。
- 玄奘(602-664)は629年長安出発。11年インド中を研学。645年長安に。仏像8体、657部持帰る。訳経は76部1347巻。「大唐西域記」を表す。

韓国から日本へ

- 仏教公伝：国家間の公式な交渉として仏教が伝えられたこと。
- 公伝以前、渡来人氏族が私的信仰として仏教をもたらし、信仰していた。
- 538年百済の聖明王から欽明天皇に仏教を先進文化として伝える。
- その後崇仏論争が起こり、崇仏派の蘇我馬子が587年に物部守屋を滅亡し決着。



高麗版大蔵経 海印寺の版木



海印寺は韓国南東部の慶尚南道にある。

出典: イラストでわかる「やさしい仏教」
 成美堂出版P100,101,116,117

日本初の大伽藍、飛鳥寺

飛鳥寺は五重塔を三つの金堂が囲む大伽藍だった。この伽藍配置は高句麗の影響と見られている。建設にあたっては、朝鮮半島から多くの寺工、瓦職人が来日した。寺院の建設は、当時の先端技術の輸入でもあった。

※伽藍とは僧院のことで、僧侶達が修行し、寝食するところをいう。

五重塔
 金堂

中国から日本へ①

- [遣隋使](#)(600-615)・[遣唐使](#)(630-894)を通じて直接中国から仏教を学ぶ。
- 753年鑑真(687-763)[来日](#)(6度目,10年目)。戒師の資格を持つ[鑑真](#)が授戒した者を日本で初めて正式の僧侶と確定できた。
- 最澄(767-822)と空海(774-835)が804年入唐。最澄は天台山で経典を書写。翌年帰国。空海は青竜寺で密教第7祖恵果和尚から奥義を伝授。20年の留学期間を待たず806年帰国。

中国から日本へ②

- 末法に入る1052年前後から阿弥陀仏にすがる浄土教信仰が源信・良忍により庶民に広がる。
- 法然(1133-1212)が数多くある大蔵経から浄土三部経だけを選び(専修・選択)浄土宗を開く。仏教史上初の自分が必要とする経典を選び学べば良いと考えた。以降鎌倉仏教として各宗が誕生。
- 道元(1200-1253)は禅だけを専修し曹洞宗を開く。
- 日蓮(1222-1282)は法華経を専修し日蓮宗を開く。
- 禅を学ぶ僧だけが入宋、他の開祖は中国に行かず。

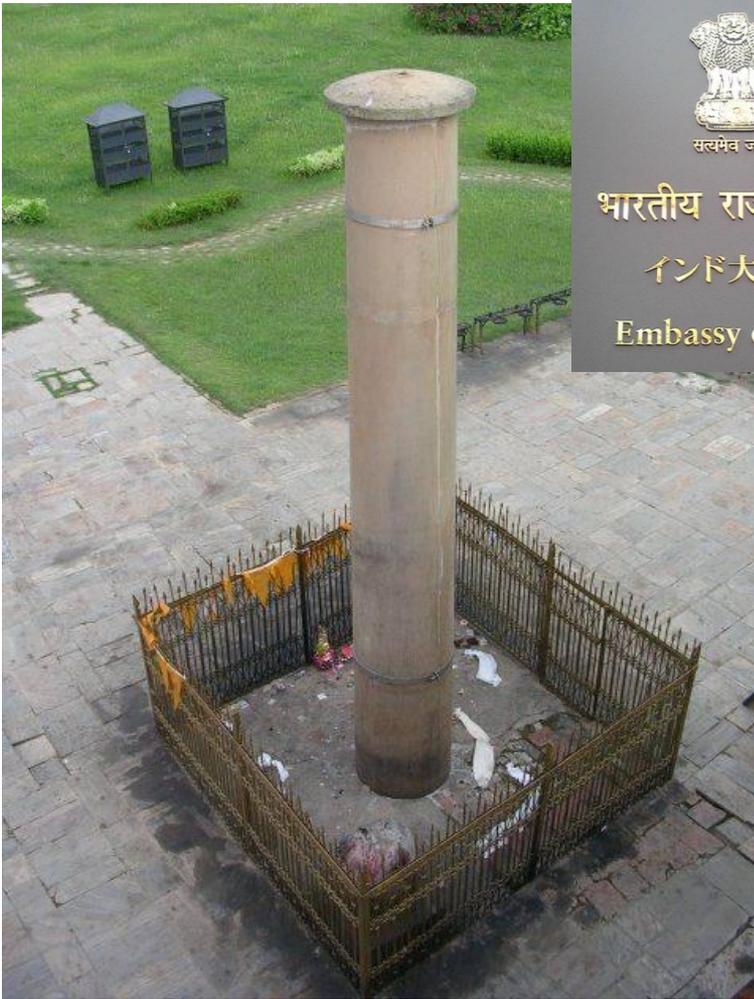
ご清聴ありがとうございました。

平成25年2月14日懇話会

出典:
<http://shinsengumi3.up.seesaa.net/image/varanasi24.jpg>

インド紋章

出典:
http://www2m.biglobe.ne.jp/%257EZenTech/gaip_hoto/p15_nepal/lunbini/Dscn1525_m.htm



法輪



ルンビニのアショーカ王石柱

サルナートの石柱獅子頭部

インド国旗

仏教伝来

出典: <http://illustration.artlesskitchen.com/?p=952>

ミリンダ王の問い

- 『ミリンダ王の問い』(Milinda Pañha, ミリンダ・パンハ)は、仏典として伝えられるものの一つであり、紀元前2世紀後半、アフガニスタン・インド北部を支配したギリシャ人であるインド・グreek朝の王メナンドロス1世と、比丘ナーガセーナ(那先)の問答を記録したものである。『弥蘭陀王問経』(みりんだおうといきょう)とも呼ばれる。パーリ語経典経蔵の小部に含まれるが、タイ・スリランカ系の経典には収録されていない(外典扱い)。ミャンマー(ビルマ)系には収録されている。
- 原典はパーリ語で伝えられ、漢訳経典としては『那先比丘経』(なせんびくきょう) [1]がある。メナンドロス1世(ミリンダ王)は、漢訳経典では弥蘭(『那先比丘経』)、あるいは弥蘭陀王(『弥蘭陀王問経』)と音写される。
- 内容は、仏教教理などについての問答であり、最後にはミリンダ王は出家して阿羅漢果を得たとされている。当時の仏教とギリシア思想との交流を示す重要な資料の一つであり、また後に、当地にギリシア美術が混じったガンダーラ美術が、クシャーナ朝に至るまで花開き、それら仏教文化が中国・日本にまで伝播してくることになる、そんな歴史の大きなダイナミズムの一端を、垣間見せてくれる資料でもある。

ミリンダ王の問いⅡ

- 王問うて曰く
- 「尊者よ、あなたは何者ですか」
- 「大王よ、私はナーガセーナとして知られています。比丘衆は私をナーガセーナと呼んでいます。しかしながら大王よ、これは名前に過ぎず、そこに人格的主体は存在しないのです」
- 「御参集の各位、五百のギリシヤ人と八千の比丘衆よ、これなる人物ナーガセーナは『人格的主体は存在せぬ』などと申しますぞ。はたして是認してよかろうか」
- 王は向きなおり、再び問う
- 「尊者よ、もし人格的主体が認められぬとするならば、あなたに資物を寄進する者は誰ですか。それを受取る者は誰ですか。修行に励む者は誰ですか。尊者よ、もしそうであるならば、あなたを殺す者に殺人の罪はないのです。尊者よ、『ナーガセーナ』と呼ばれるものは何ですか。あなたの頭髪がナーガセーナなのですか」
- 「大王よ、そうではありませぬ」
- 「尊者よ、ではあなたの爪が、歯が、皮膚が、肉が、筋が、骨が、骨髄が、心臓が、汗が、脂肪が、涙が、唾液が、鼻汁が、小便が、頭蓋の中の脳髓がナーガセーナなのですか」
- 「大王よ、そうではありませぬ」
- 「そうではなくてと、では尊者よ、様態、感受、知覚、表象、認識の総体がナーガセーナなのですか」
- 「大王よ、そうではありませぬ」
- 「尊者よ、私はあなたに問いを重ねつつ、ナーガセーナの何たるかをいっかな合点できませぬ。ナーガセーナとは単なる名辞に尽きるのか。それにしてもこの際ナーガセーナとは何者か。尊者よ、あなたは事実無根の虚言をなされますぞ。『ナーガセーナは存在せぬ』などと」
- ナーガセーナ問うて曰く
- 「大王よ、もしやあなたが車でおいでになりましたのなら、それがしに車の何たるかを述べて下さいませ。大王よ、轆が車でしょうか」
- 「いや、尊者よ、そうではありませぬ」
- 「大王よ、では車軸が、車輪が、車室が、車台が、軛が、軛綱が、鞭打ち棒が車なのですか」
- 「いや、尊者よ、そうではありませぬ」
- 「そうではなくてと、ではそれら各部分とは別に車があるというわけですか」
- 「いや、尊者よ、そうではありませぬ」
- 「大王よ、私はあなたに問いを重ねつつ、車の何たるかをいっかな合点できませぬ。車とは単なる名辞に尽きるのか。それにしてもこの際車とは何たるか。大王よ、あなたは事実無根の虚言をなされますぞ。『車は存在せぬ』などと」
- 「御参集の各位、五百のギリシヤ人と八千の比丘衆よ、これなる人物ミリンダ王は『車は存在せぬ』などと申しますぞ。はたして是認してよかろうか」
- 「尊者よ、それがしはうそ偽りをしゃべってはおりませぬ。車とは轆、車軸、車輪、車室、車台に依存して、名のみのもので成立するのでございます」
- 「よくこそ申された、大王よ、あなたは車の何たるかをお解りでいらっしゃる。それと全く同様でございます。大王よ、それがしにつきましても『ナーガセーナ』とは頭髪、爪、歯、皮膚、肉、筋などの各部位に依存し、様態、感受、知覚、表象、認識に依存して、名のみのもので成立する一方で『人格的主体は存在せぬ』という次第であります」

、「車」という観念は、物質が私たちの感覚作用や認識作用を刺激することで生まれる仮象ということである。

出典：<http://www.systemicssystem.com/ja/%E3%83%9F%E3%83%AA%E3%83%B3%E3%83%80%E7%8E%8B%E3%81%AE%E5%95%8F%E3%81%84>

仏教の黎明期② 論蔵の登場 — アビダルマ

高僧たちは「論蔵」アビダルマ」の構築に没頭した

仏滅後百年頃から、ブッダの教えと戒律の保守に努めてきた高僧たちの間で「経」の研究が盛んになった。当時のインドは交易が栄え経済の発展期にあり、王や貴族、大商人たちが仏教を保護したために、僧たちに生活の不安はなかった。そこで高僧たちは遊行をせず、山林の僧院にこもって仏教の理論化・体系化に励んだのである。

「論」は経に対する解釈から始まり、経を整備し、問答しながら解釈を深めていく。「経」教え「法(ダルマ)」に対する(アビ)研究という意味で論蔵のことをアビダルマという。

難解な哲学としてのアビダルマ

ブッダの時代から、問答によって教義の理解が行われていた。それは相手に応じて例を出すなど、わかりやすさを第一の価値としていた。しかし、アビダルマは一つの事象、一つの教えの中に深く沈滞しそこから何十もの哲学的思弁を引き出す。その作業自体が学究する僧たちにとって悟りへの道だった。僧たちが真剣に取り組みほどにアビダルマは難解を極め、ブッダの教えをもとにしながらも、一般の人々にはとって理解できない哲学思想大系の作成に終始した。

膨大な思索の体系が生み出される

学僧たちの論議は次第に煩瑣な思弁の世界に展開していった。たとえば禪定や解脱は細かく区分けされ、僧院内の学僧たちだけが、その用語を知って

論蔵が作られ「経・律・論」の三蔵がそろった

公式に「論」について話し合われたのは、アショーカ王(72ページ)のもとで開催された上座部の第三結集時だといわれている。ブッダの教えである「経」と戒律の「律」、それに経の解釈研究や解説の「論」。この三つがそろったことで、仏典の集大成としての「三蔵」が成立した。

さらに細かく分裂を続けた教団は、独自に経の解釈を「論」にまとめた。こうして部派によってそれぞれの三蔵がもたれることになった。それからも論蔵は、時代とともに研究が進み文献の量も次第に増えていった。

いるというレベルに踏み込んでいったのである。それはヨーロッパ中世の修道院で研究されたスコラ哲学(煩瑣哲学)以上に発達した。論議は世俗社会とは隔絶し、一般人からはその難解さに聖なる力があると期待されて、王族からの寄進も集まったのである。そして非常に多くの難解な用語が生まれ、經典にもしばしば列記されて、のちには、それが呪文のように唱えられるようにもなっていた。

民衆の救済を怠る出家僧に在家信者の不満が爆発した

同じ頃、仏舎利塔が一般民衆の信仰・崇拜の場になっていた。上座部とたもとを分けた大衆部の一部は積極的に民衆の中に入っていく、また仏舎利塔の管理者たちが礼拝者たちを受け容れ、民衆を中心とした信仰集団を形成した。そしてすべての人が救われる仏教を目指し、大乘へとつながる新しい流れを作っていた。

根本分裂後、上座部による教義の学究は「論蔵」アビダルマを生み出した。しかしその難解さからぬけ出したグループが、仏教の流れを変えていった。

出典:イラストでわかる「やさしい仏教」
成美堂出版P70,71

説一切有部の論蔵

上座部系の中でも最も力のあった説一切有部(「すべてがある」)の意の七種の論蔵には以下のものがある。

- 【集異門足論】
- 【法蘊足論】
- 【施設論】
- 【識身足論】
- 【界身足論】
- 【品類足論】
- 【発智論】



「発智論」はのちに注釈をつけ、さらに学説を発展させて二百巻の大冊「大毘婆沙論」になった

アビダルマの功罪



〈高僧たち〉



〈在家信者〉

アビダルマ(論)の登場は、理論の専門化・体系化をまねき、仏教哲学の論述という実を結んだ一方で、一般民衆との溝を広げていった。

ブッダ その後の仏教

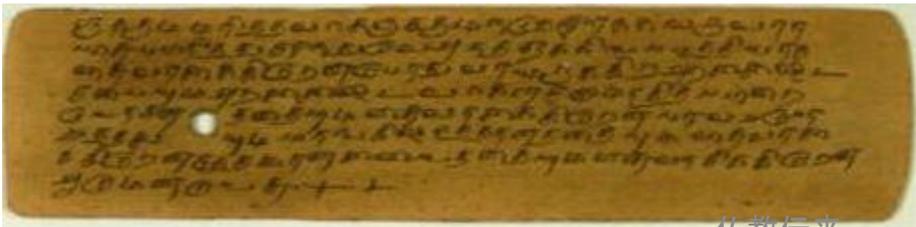
仏教の黎明期②

71 仏教用語集 「大衆」 「マハーサンギカ」の訳で本来は仏から虫まで生きるものすべてを表した。のちに「多数の修行僧」、さらには説法に集まる人々という意味にもなった。

70 仏教雑学 「三蔵」の「蔵」はパーリ語とサンスクリット語の「ピタカ」の漢訳。仏教に関する文献の集大成。「論」は経の注釈・解釈のことだが、「論蔵」はそれら解釈文献の集まりを意味する。

貝葉

- 貝葉(ばいよう)とは、椰子などの植物の葉を加工して、紙の代わりに用いた筆記媒体。東南アジア、南アジアで多く利用された。貝多羅葉(ばいたらよう)の略称である。
- 貝多羅葉(ばいたらよう)の名称は、古代インドで植物の葉が筆記媒体として用いられていたため、サンスクリットで「木の葉」の意味を持つパットラ(pattra)と、さらに主に用いられたオウギヤシ(パルミラヤシ)である「ターラ(tala、多羅樹)の葉」を漢訳したものを起源とする。原材料は地域や植生によって様々な材料が用いられるが、主にヤシ科のパルミラヤシ(*Borassus flabellifer*)、タラバヤシ(学名: *Corypha umbraculifera*、utan、グバンヤシ *gebang utan* とも)などが使用される。貝葉は、タイではバイ・ラーン(ใบลาน)、インドネシアではロンタール(lontar)と呼ばれる。
- 仏教の経典は初期には「貝葉」に書かれた。たとえばパキスタンのギルギットで出土した「法華経」は5-6世紀のものと考えられている。



出典:

http://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/f/fb/Christian_prayers_in_tamil_on_palm_leaves.jpg

法華經のシルクロード伝播 参考地名地図

「法華経—平和と共生のメッセージ」展 (公益財団法人)



地名索引		
アフガニスタン	A3	長安
アルタイ山脈	E1	テリー
インド	C6	天山山脈
ウルムチ	D1	トルファン
雲崗石窟	H2	敦煌
カーダリク	C3	ナーランダー
カブール	A3	ニヤ
カシ米尔	B3	ネパール
カシュガル	C2	バーミアン
カトマンズ	D4	パキスタン
カラコルム山脈	C3	ハミ
カラチ	A5	バミール高原
カラホト	F2	ヒマラヤ山脈
ガンダーラ	A3	ブッダガヤー
キジル千仏洞	D2	フバ
ギルギット	B3	炳靈寺石窟
クチャ	D2	北京
ゴビ砂漠	F1	ペシャワール
コルラ	D2	ベゼクリク
崑崙山脈	D3	ペナレス
サールナート	C5	ホータン
サンチー	C5	マトゥラー
サマルカンド	A2	ムンバイ
スリナガル	B3	モンゴ
成都	G4	ヤルカンド
大同	H2	ラージギル
タキシラ	B3	洛陽
タクラマカン砂漠	C2	蘭州
タシケント	B2	龍門石窟
タリム盆地	D2	涼州
チェルチェン	D2	ルンビニ
チベット高原	D4	桜

シルクロード「オアシスの道」の3つの

シルクロードとは、日本と地中海世界の間の歴史的な東西交通のオアシス都市を中継地とする「オアシスの道」、北方の「草原の海」の3つの幹線がある。ここでは、特に法華経が伝播した「道の3つのルートを紹介する。

- **天山北路**
敦煌北方のハミを起点に天山山脈の北側を横断する
- **天山南路**
天山山脈の南側を通るコースで、タリム盆地の中心にあるタクラマカン砂漠の北を通るルート
- **西域南道**
タリム盆地の中心にあるタクラマカン砂漠の南を通る

出典：東洋哲学研究所「法華経平和と共生のメッセージ展」パンフレット

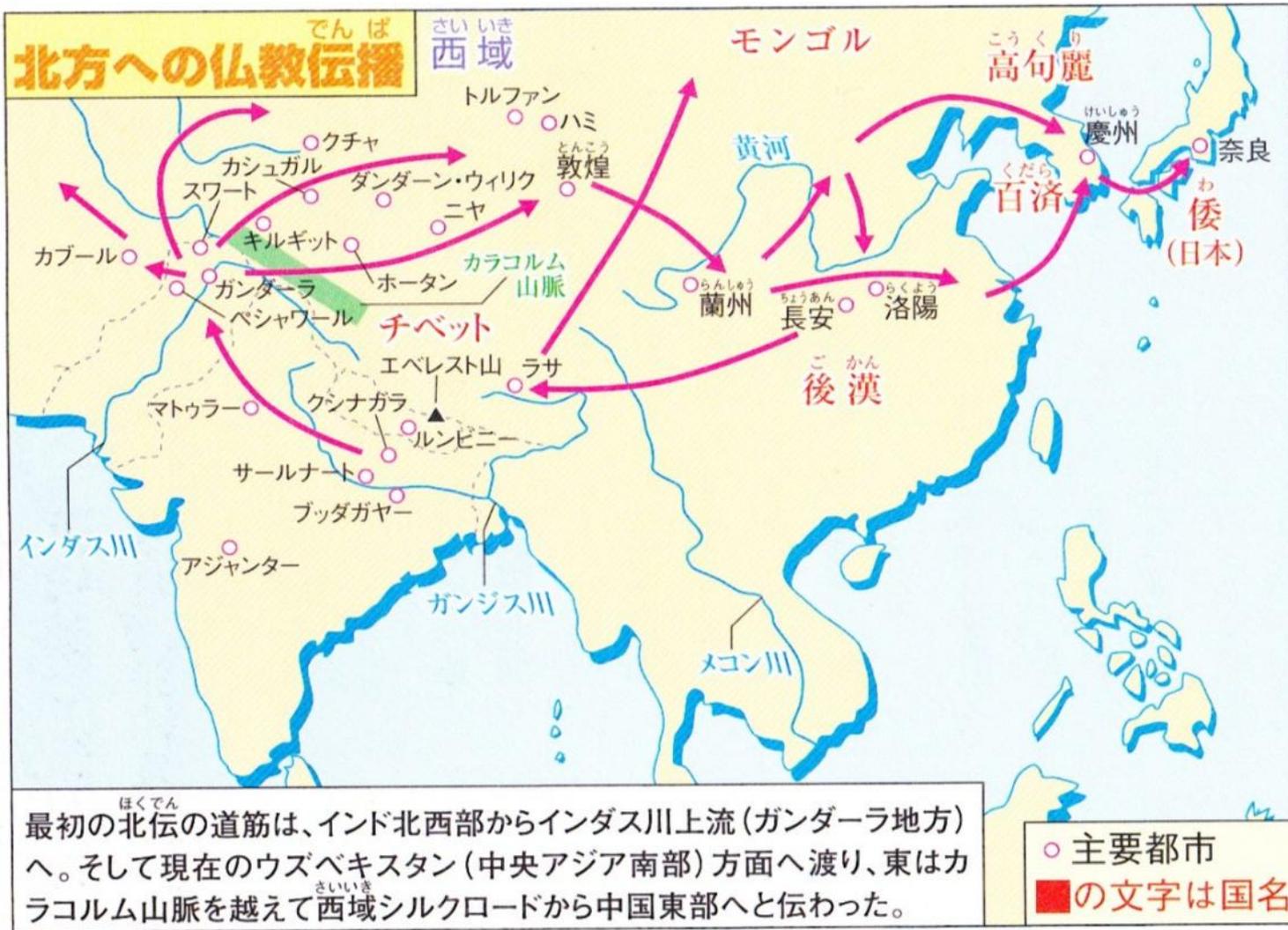


げんじょう
玄奘

実際は馬に乗り
従者を引き連れていた。

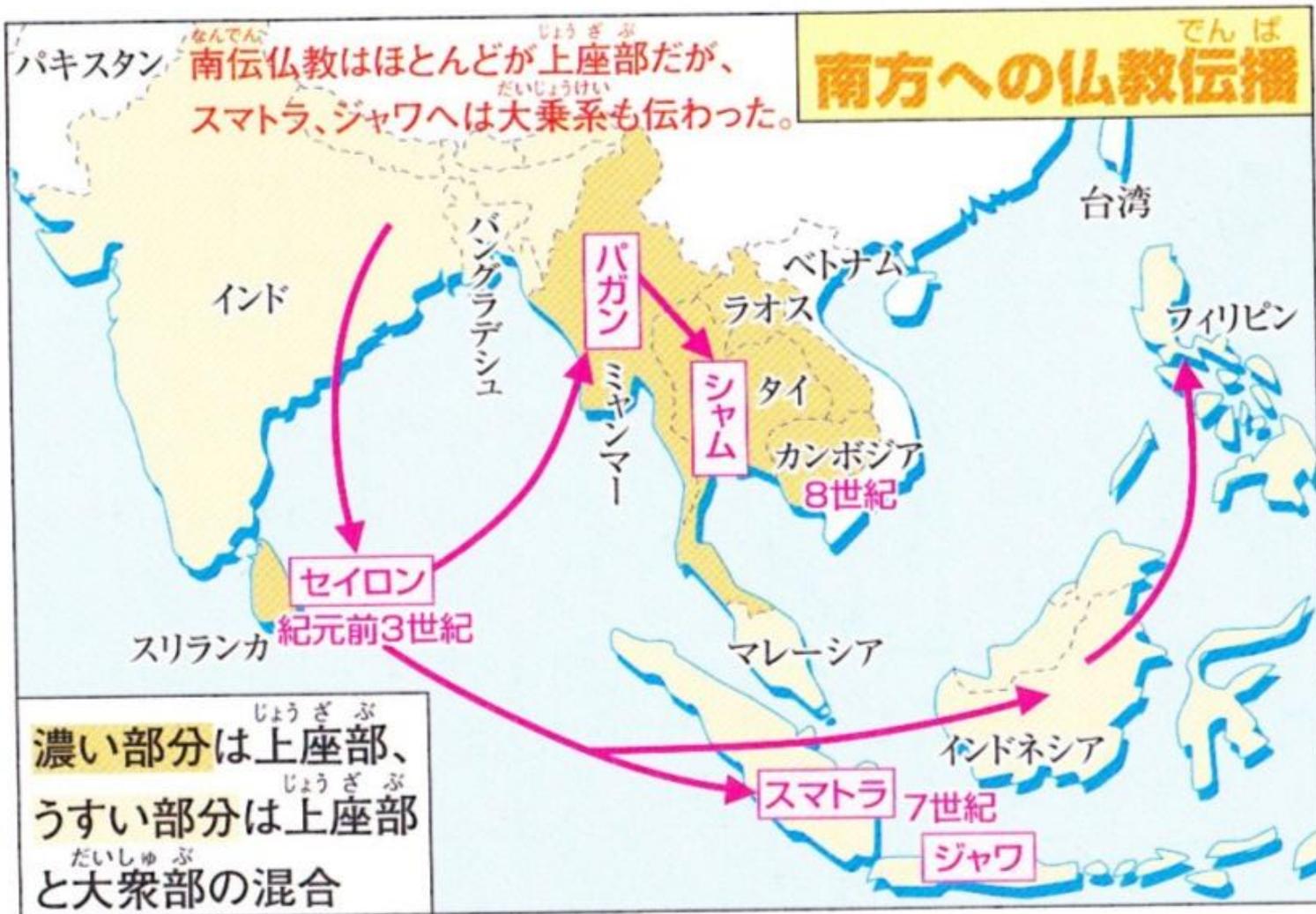


出典：イラストでわかる「やさしい仏教」
成美堂出版P95,109



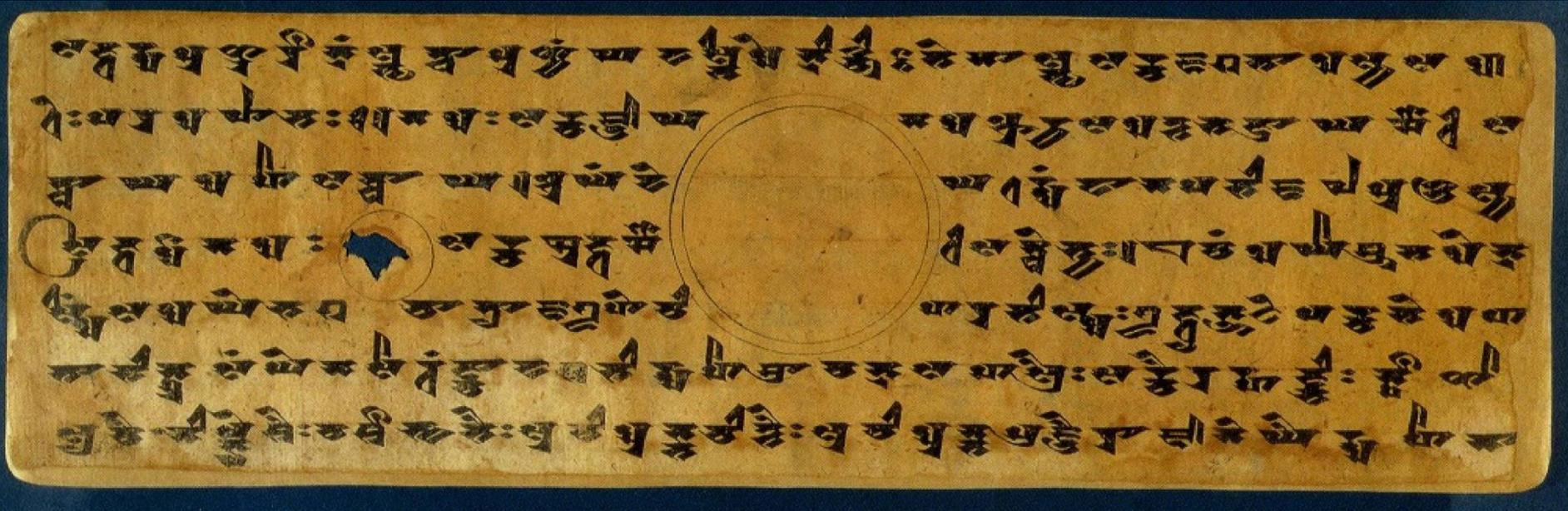
北方への伝搬ルート

出典：イラストでわかる「やさしい仏教」
成美堂出版P74,75



南方への伝搬ルート

出典：イラストでわかる「やさしい仏教」
成美堂出版P74,75



サンスクリット語
文字順; 左から右



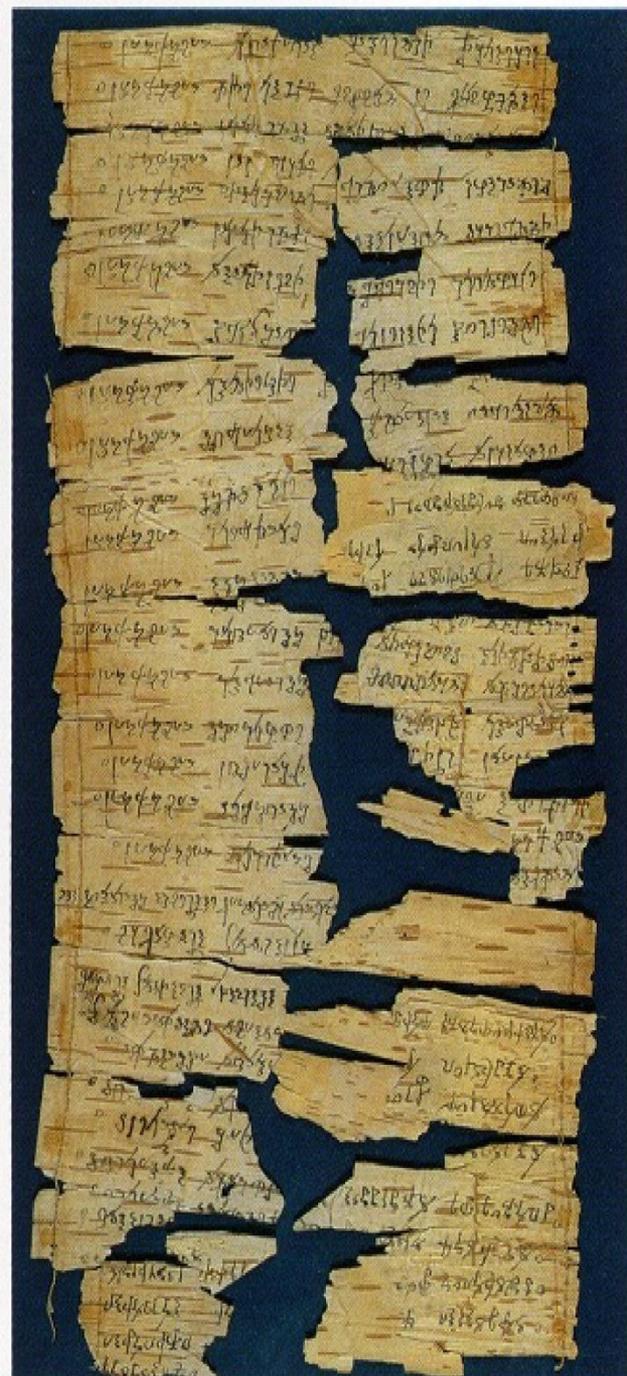
材質: 貝葉

内容: 法華經

1. SI P/5.

Sanskrit manuscript of the *Saddharmapuṇḍarīka-sūtra*, f. 6b, colophon of the stotra and beginning of chapter 1.

1. SI P/5. 梵文『法華經』写本(カシュガル本, いわゆるペトロフスキー本), 292葉. フォリオ・サイズ: 56×17.5 cm. 7行本. 7-8世紀の書写. 南トルキスタン・ブラーフミー文字. 紙本, ポーティ(横長の長方形の貝葉・紙等を重ねたもの). 内容は法華讃頌, 1-11, 13-17章. 写真はf. 6b, 讃頌と1章の冒頭.



8. SI P/144.

Prakrit manuscript of the *Dharmapada*, fragment M.

8. SI P/144. ガンダーラ語『法句経』写本, 断簡M. サイズ: 45×24 cm. 33行. 1-2世紀の書写. カローシュティー文字. 樺皮. 写真は断簡M.

ガンダーラ語
文字順; 右から左



材質: 樺皮

内容: 法句経

ホータン・サカ語: 文字順; 左から右

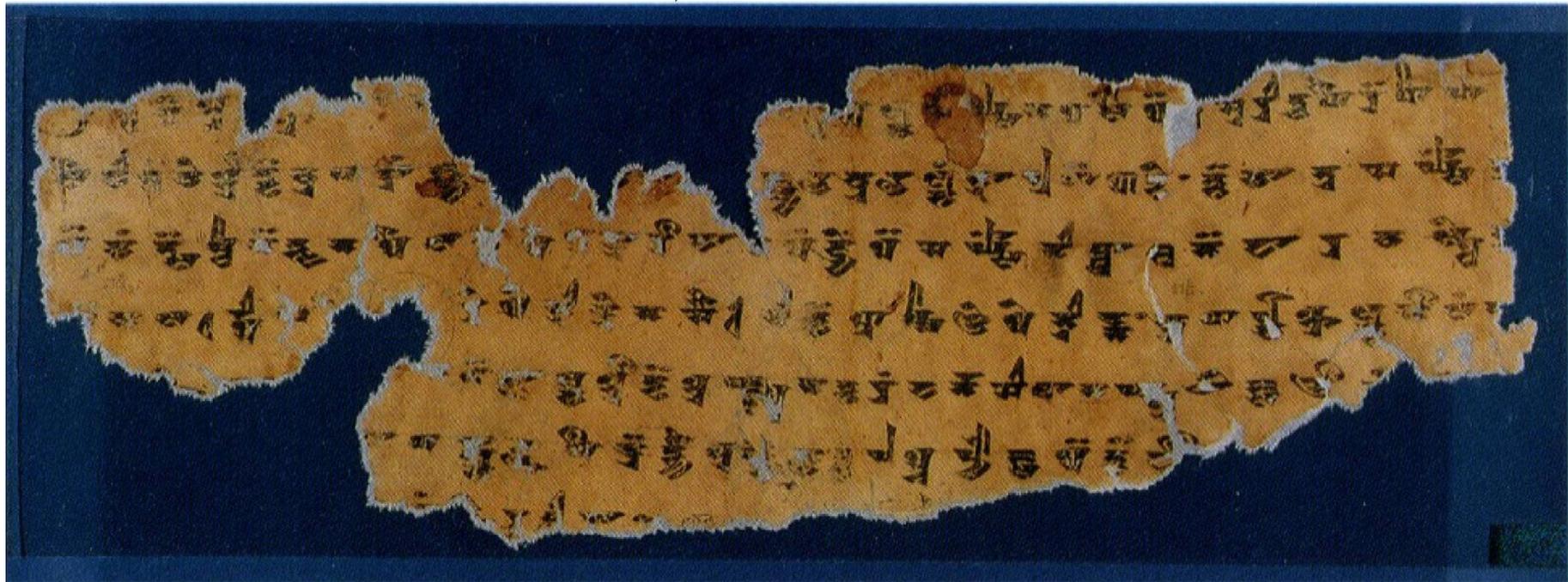
材質: 紙

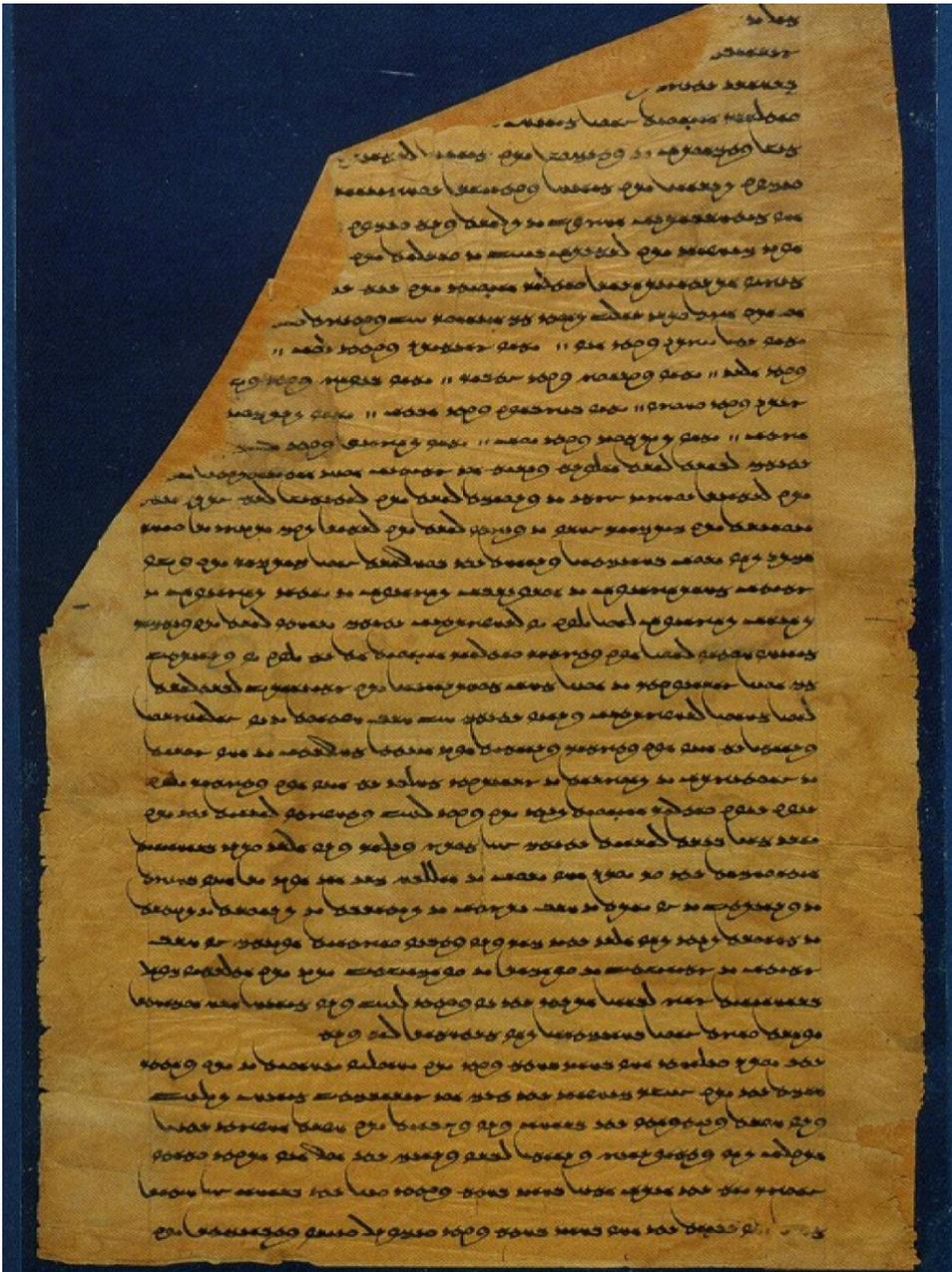
内容: 法華經

9. SI P/62 (7).

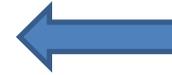
Khotanese Saka manuscript of the *Saddharmapundarīka-sūtra*, folio 1, foreword to the text.

9. SI P/62 (7). ホータン・サカ語『法華經』写本断簡2葉. サイズ: 53.3×15 cm, 55×17 cm. 7-8世紀の書写. 南トルキスタン・ブラーフミー文字. 紙本, ポーティ. 写真は冒頭の讃頌の部分, folio 1.





ソグド語
文字順; 右から左

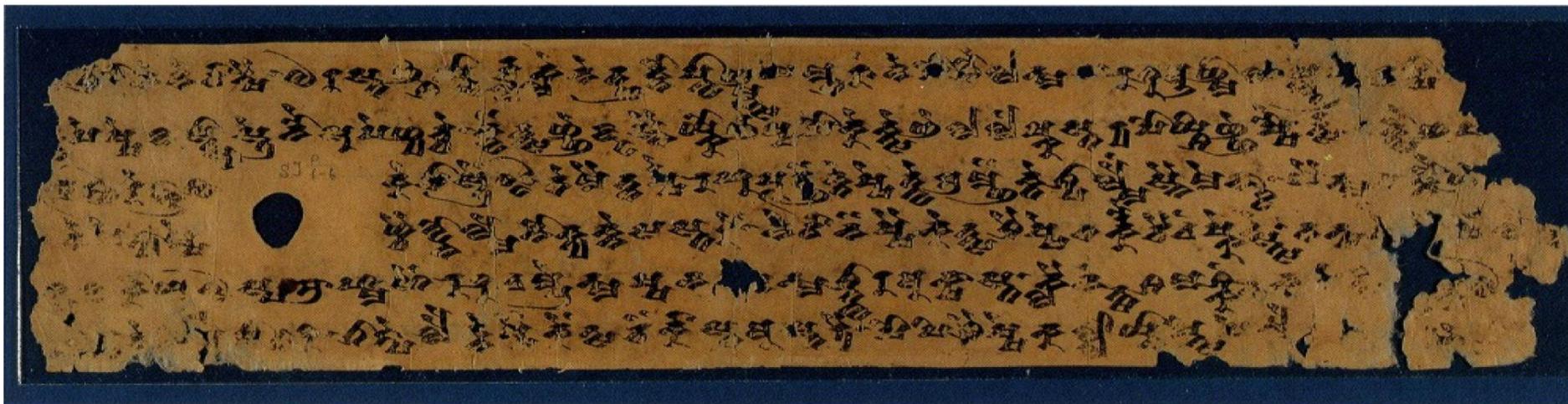


材質: 紙

内容: 鸚鵡經(業の小分析)

14. SI O/106.
Sogdian manuscript of the *Śuka-sūtra*.

14. SI O/106. ソグド語『鸚鵡經』写本。
サイズ: 26.5 × 47 cm. 39行. 7-8世紀の書写。
巻本の一部。



トカラ語
文字順; 左から右



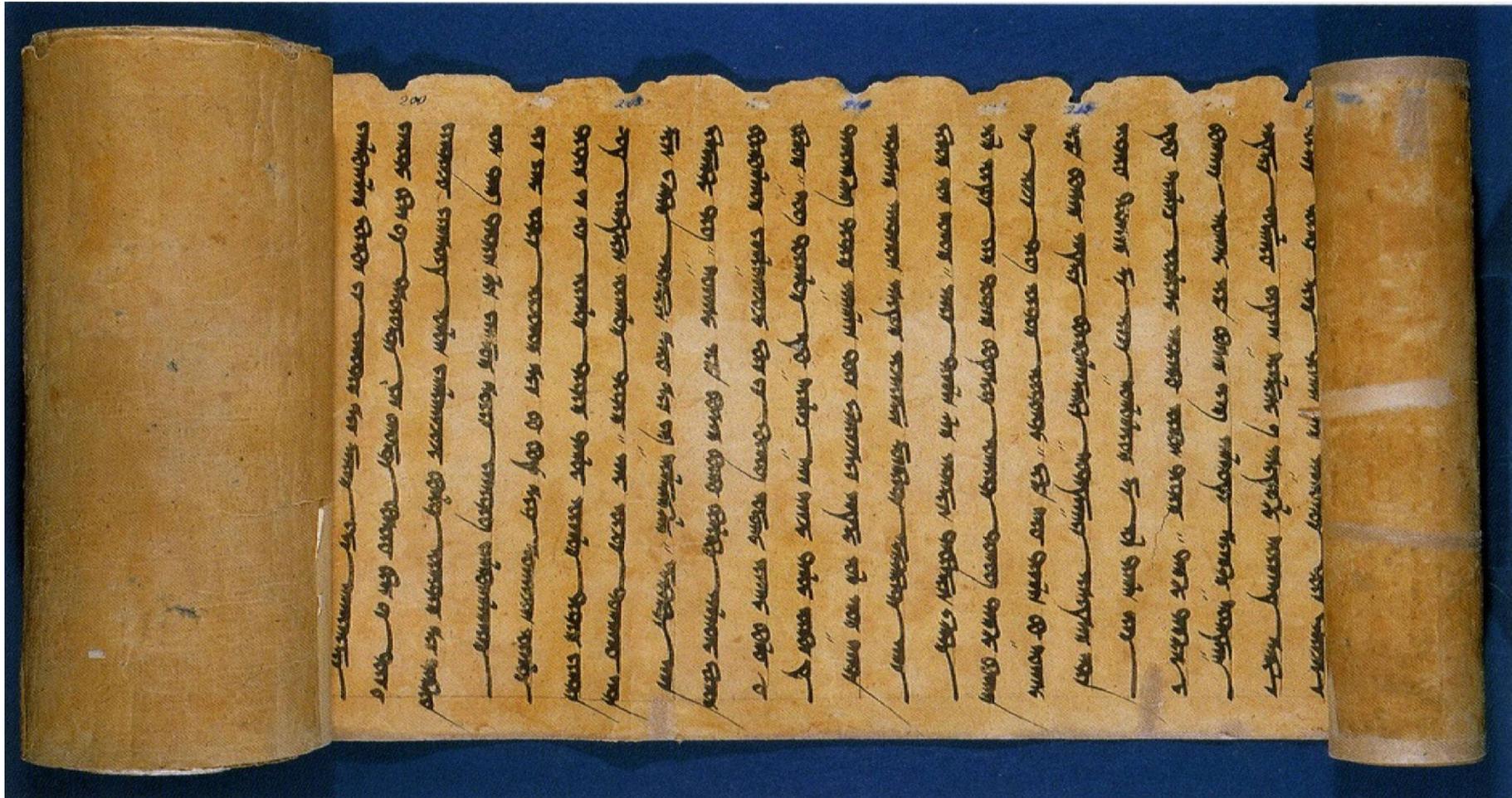
材質: 紙

内容: ウダーナヴァルガ(法句経)

13. SI P/1b, 2b.

Tocharian manuscript of the *Udānavarga*, fragment 1b, recto.

13. SI P/1b, 2b. トカラ語B『ウダーナヴァルガ』写本2葉. サイズ: 38×9 cm. 6行本.
7世紀の書写. 北トルキスタン・プラーフミー文字. 紙本, ポーティ.
写真はfragment 1b, recto.



11. SI D/2.

Old-Uighur manuscript of the *Avalokiteśvara-sūtra*, end of the scroll, lines 205–225.

11. SI D/2. 古ウイグル語『法華経観音品』写本, 1巻本. サイズ: 348×29.2cm. 243行. 9世紀の書写. 紙本, 巻本. 写真は巻の終りの部分, 205–225行.

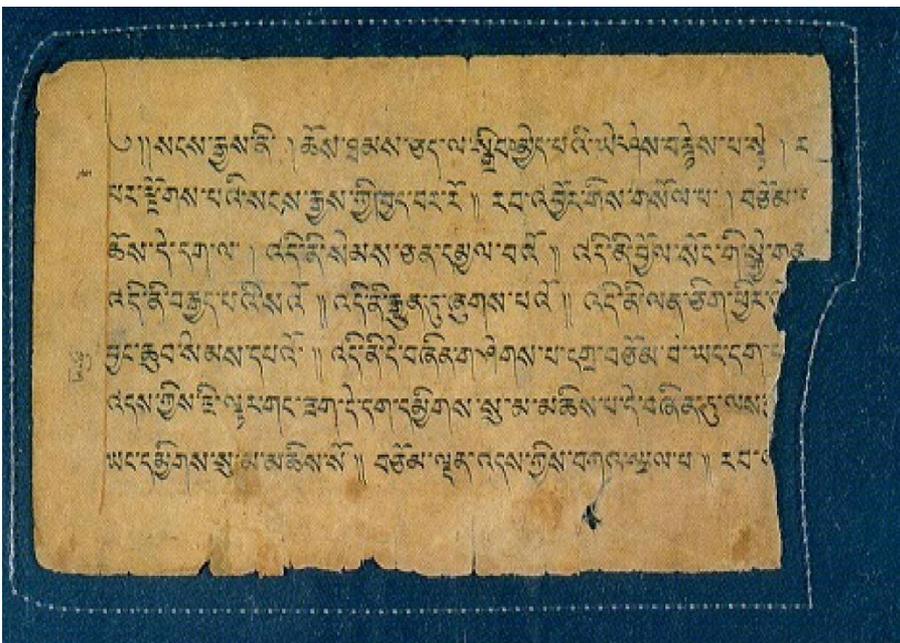
仏教伝来

行順: 

内容: 法華経

材質: 紙

古ウイグル語
行順: 左から右⁴²



チベット語
文字順; 左から右



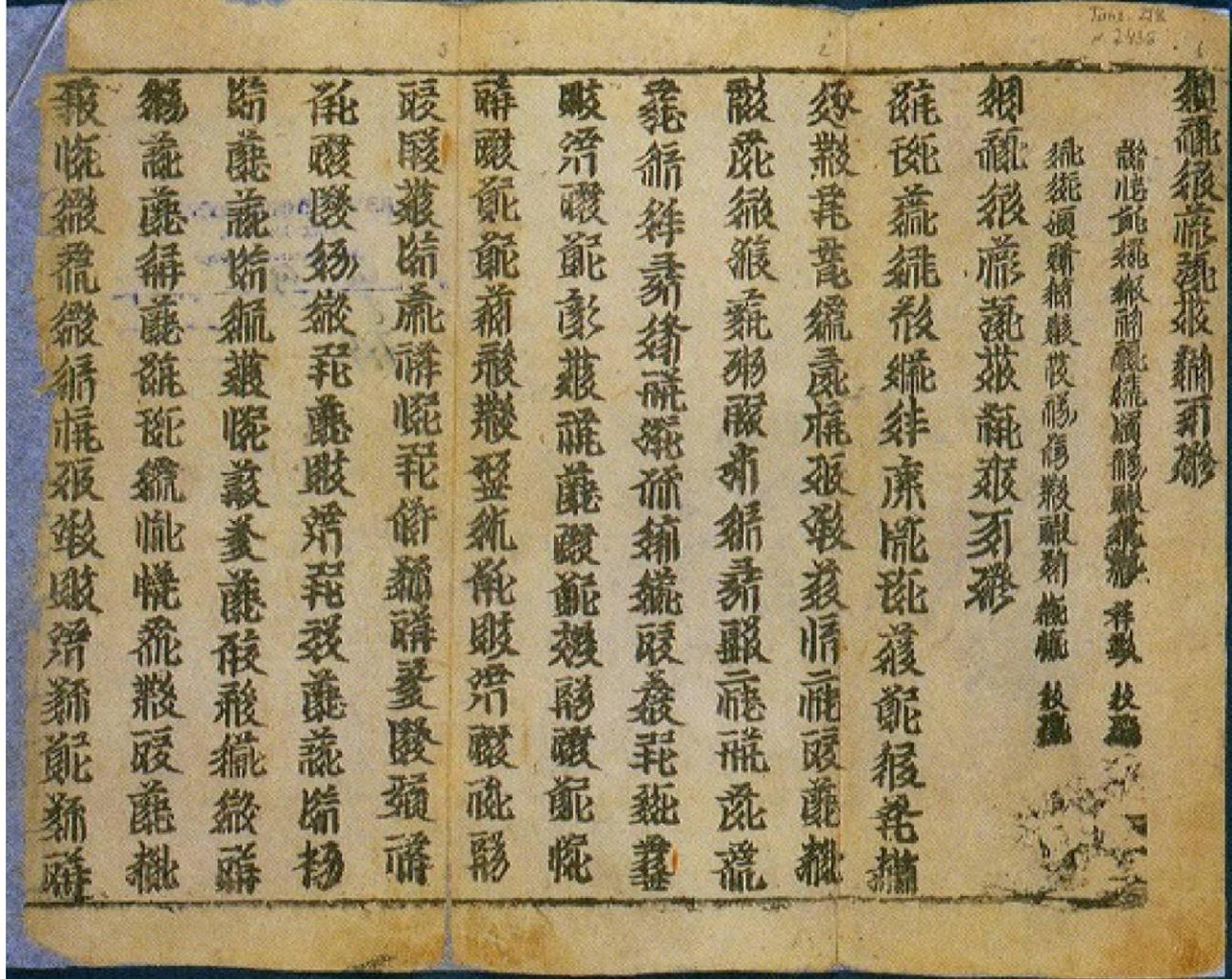
材質: 紙

内容: 大般若経

19. KhT-88.

Tibetan manuscript of the *Mahāprajñāpāramitā-sūtra* from Khara-Khoto, f. 20, with Tangut verses on the reverse side.

19. KhT-88. ハラホト出土チベット語『大般若経』写本, 裏面は西夏語韻文. チベット語は8-9世紀の書写.
西夏語は12世紀の書写.



行順； ←

西夏語

行順；右から左

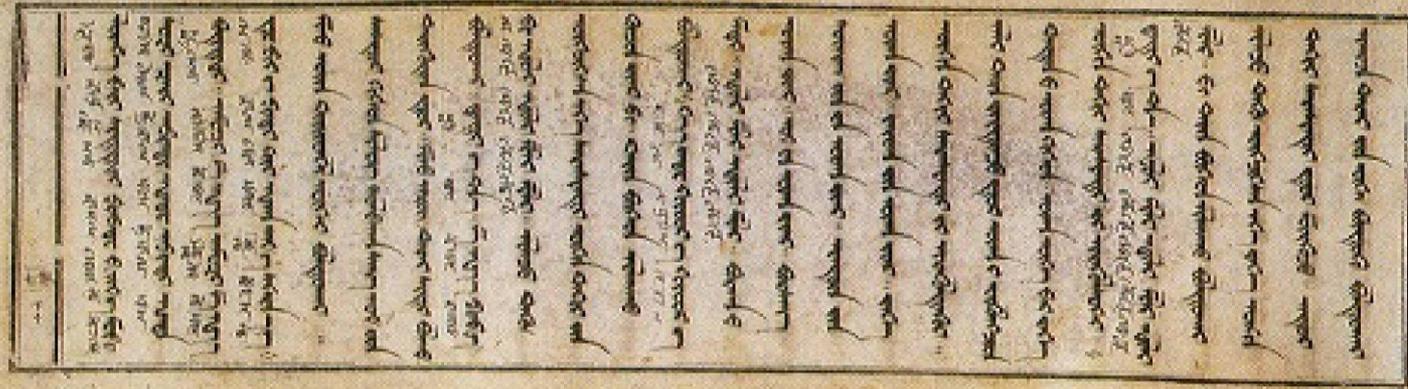
材質：紙

内容：法華經

27-3. Tang 218, no. 2436. 西夏語『法華經』
 木版折本, 1-2章. サイズ: 26.5×10.5 cm.
 紙本. 11世紀の書写. 冒頭に西夏の王室が訳經に
 関与したと言及がある. 写真は ff. 1-3.

27-3. Tang 218, no. 2436.
 Tangut xylograph of the *Lotus Sutra*, ff. 1-3,
 introduction preceded by a mention of the
 imperial family's participation in the translation.

行順;



16. K-20.

Mongolian xylograph of the *Suvarṇabhāsa-uttamarāja-sūtra*, chapter 7, f. 10a.

16. K-20. モンゴル語『金光明最勝王経』

木版本, 235葉. フォリオ・サイズ: 60 × 21 cm.

25行本. 1659年の開版. 紙本, ポーティ.

写真は7章, f. 10a.

内容 : 金光経

材質 : 紙

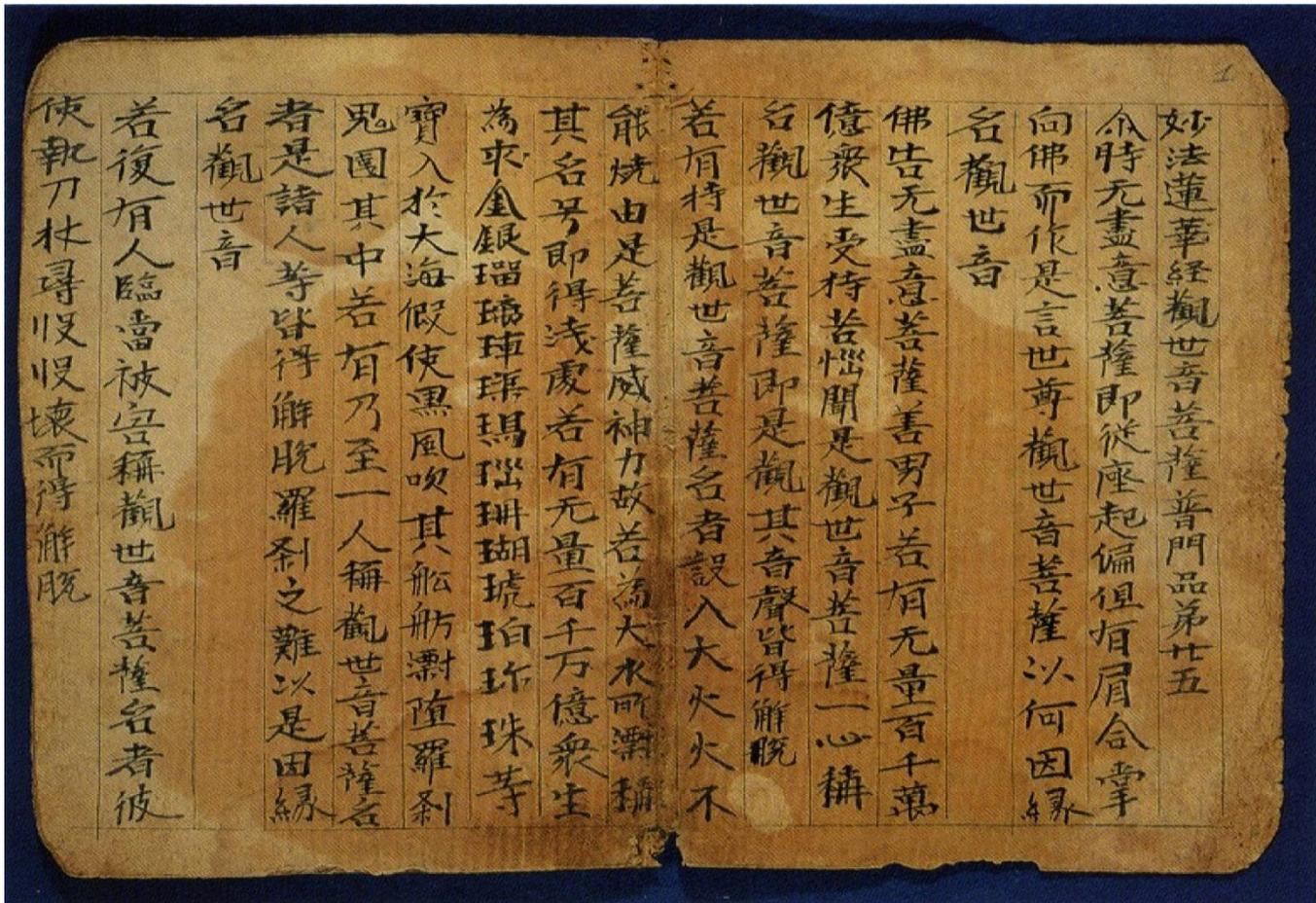
モンゴル語
行順 ; 左から右

中国語

行順；右から左

材質：紙

内容：法華經



行順； ←

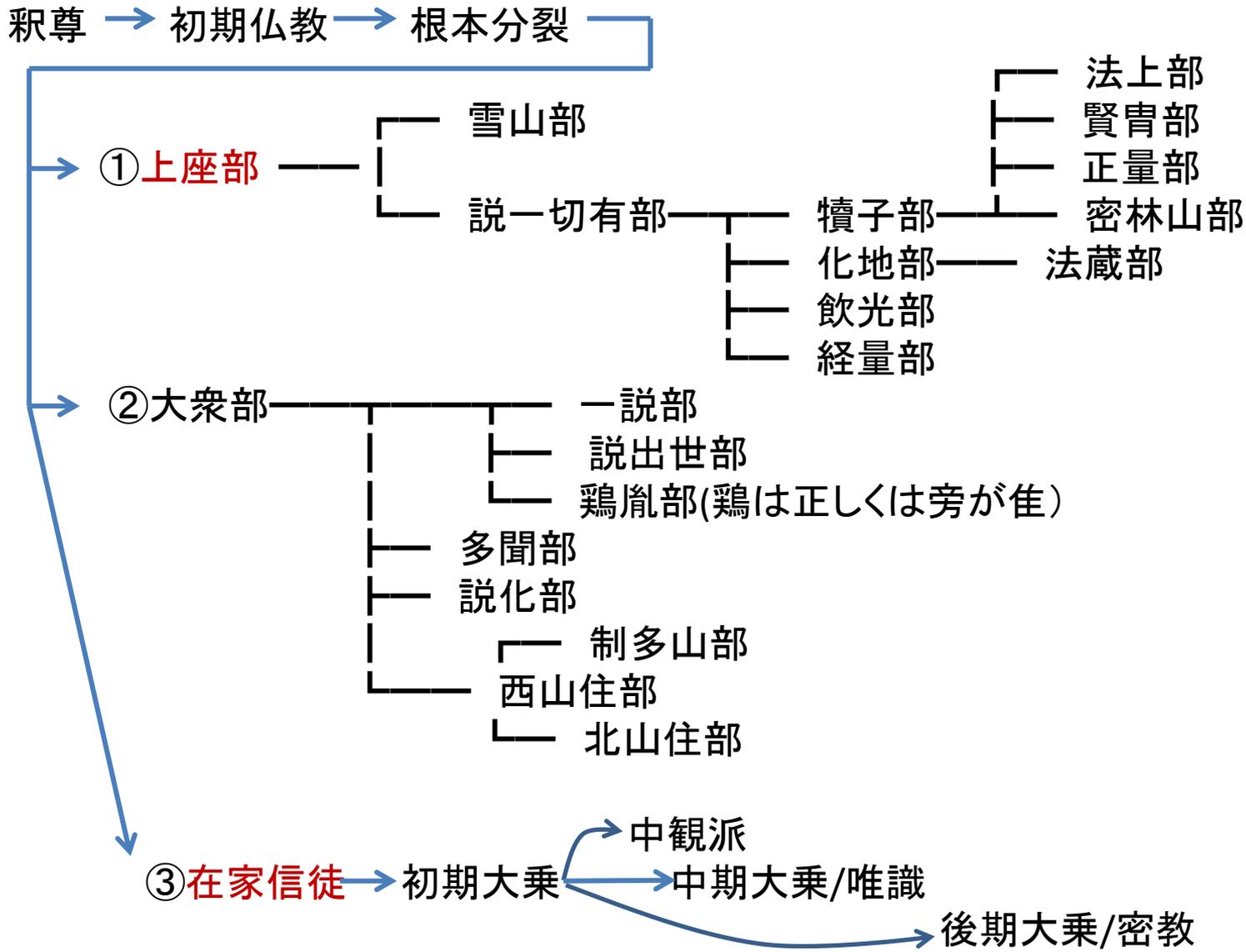
37. F-174.

Chinese manuscript of chapter 25 of the *Lotus Sutra*, quire, beginning of the text of the “Kuan-shih-yin p’u-sa p’u-men p’in.”

37. F-174. 鳩摩羅什訳『妙法蓮華經』25章（觀世音菩薩普門品）

写本冊子本. サイズ: 15×29.5 cm. 紙本. 10世紀の書写.

写真は冒頭部分.



インドの仏教の哲学者

- 第1結集
十大弟子、迦葉(マハカーパシヤ)阿難(アーナンダ)優波離(ウパーリ)
- 第2結集
ヤシャス(保守派=上座部)とヴァツジブッタカ(改革派=大衆部)
- 第3結集
モッガリプッタ(上座部高僧)
- 第4結集以降
竜樹(ナーガルジュナ) (中観派)
無着(アサンガ)・世親(ヴァスバンドウ)兄弟(唯識派)

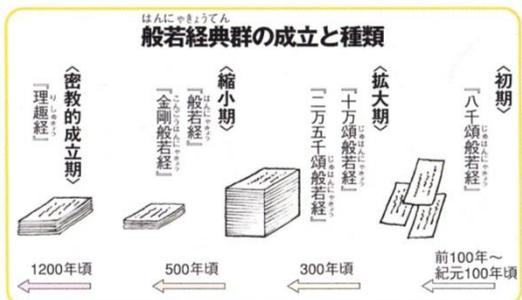
十大弟子

- | | | |
|-----------------|------|----------------------|
| • サーリブッタ(舍利弗) | 智慧第一 | 釈尊より先に死亡 |
| • モツガラーナ(目犍連) | 神通第一 | 刺客に殺される |
| • マハーカッサバ(摩訶迦葉) | 頭陀第一 | 厳しい頭陀行
第一結集主催 |
| • アヌルッタ(阿那律) | 天眼第一 | 不眠により失明 |
| • スプーティ(須菩提) | 解空第一 | 争いが無い人 |
| • プンナ(富楼那) | 説法第一 | 弁舌巧み |
| • カッチャーヤナ(迦旃延) | 論議第一 | 理論家 |
| • ウパーリ(優波離) | 持律第一 | 理髪師出身、
第1結集で律を誦出 |
| • ラーフラ(羅睺羅) | 密行第一 | 釈尊の実子 |
| • アーナンダ(阿難) | 多聞第一 | 釈尊のいとこ、
第一結集で経を誦出 |

大乘仏教の完成者：竜樹

- アショーカ王が建立した多数の仏塔を在家信者が運営。自らをボーディサットヴァ(菩薩)と呼ぶ。中から文学運動起こる。
- その中から般若経・法華経・維摩経など大乘経典が作られた。
- 大乘仏教は①釈尊の教えの原点「空」思想の再確認②利他行の実践(出家も大衆も共に救われる)③スケールの雄大さ④三身仏(法身仏、応身仏、報身仏)の思想を生み出す。
- 竜樹(150-250)は般若経に基づき独特の空観哲学を生み「中論」を著す。上座部の論蔵(アビダルマ)の哲学を片っ端からぶち壊した。
- 竜樹以降中観派・唯識派が誕生し学問仏教化。現世利益を志向する人々は護呪・陀羅尼を唱え、「真言(マントラ)」を生むきっかけ。{釈尊はまじないで現世利益を得る事を禁じたが、護呪・陀羅尼の短い言葉は禁止しなかった}
- 南インドから密教が始まった。7-8世紀に密教経典として大日経・金剛頂経が成立。密教では大日如来を中心に三輪身の思想。「明王・天」がヒンドウの神から転身して生み出された。

般若経



六波羅蜜 菩薩の修行方法。釈迦の前世物語には十波羅蜜もあった。

波羅蜜とは

- 持戒波羅蜜**: 戒を守り正しい生活をする
- 精進波羅蜜**: 昼夜を問わず良い行いに励む
- 禪定波羅蜜**: 精神を集中する
- 般若波羅蜜**: 智慧の完成 空の認識と実践
- 布施波羅蜜**: 物質的・精神的な施しを与える
- 忍辱波羅蜜**: 何事も平静に耐える

色即是空

出典: イラストでわかる「やさしい仏教」成美堂出版P79,80,81,83,85,86

中観派と唯識派

中観派と唯識派

〈中観派〉
すべてのものは無自性で 空・縁起 (関係性) によってのみ存在する。

〈唯識派〉
認識 ということを認識する。それが絶対性である。

多くの仏が誕生

大乘仏教の多仏思想

様々な仏が今ここに存在する

- 阿彌陀如来
- 薬師如来
- 阿閼如来
- 釈迦仏

大乘仏教の菩薩
仏と人の中にあり修行の模範。成仏せず人々を助ける

仏教伝来

大乘と小乗

大乘仏教から見た大乘と小乗の相違

小乗 (おもに上座部)

- 出家主義**: 一仏 (仏はブツだけ)
- 自利**: 自分の悟りが目的!
- 形式主義**: 理論分析
- 経の種類**: 『パーリ語三蔵』 (法句経) (スッタ・ニパータ)
- 他国への広がり**: スリランカ ラオス タイ ミャンマー カンボジア

大乘

- 在家主義**: 他家の幸福を願い皆が救済されるのが目的
- 多仏**: いつどこにでも仏はいる
- 直観主義**: 無分別的实践 本当の真実を悟る
- 経の種類**: 『般若経』 『法華経』 『華嚴経』 『維摩経』
- 他国への広がり**: 中国 朝鮮 日本 おもに北伝

密教

密教 密教は大乘仏教とヒンドゥー教の神秘性を積極的に発展させた

衆生救済の 大乘仏教 (修行) → 実益 (神秘) → 密教

ヒンドゥー (鬼神、土着神、神通、魔術)

無着

- 無着(無着 むぢやく、サンスクリット:asaNga アサンガ)はインドの大乗仏教唯識派の大学者。生没年は不詳だが、310 - 390年ころの人。
- 西北インドのガンダーラ国(現在のパキスタン、ペシャール地方)にバラモンの子として生まれた。父はカウシカ(kauCika、去尸迦)、母はビリンチ(viriJci、比隣持)、兄弟3人のうちの長男であった。実弟の内、次男の方は説一切有部から唯識派に転向して大成した世親(ヴァスバンドウ)。三男の方は説一切有部の比隣持跋婆(ヴィリンチヴァッサ)。兄弟全員が世親(ヴァスバンドウ)という名前であるが、長男は無着、三男は比隣持跋婆という別名で呼ばれるため、「世親」という名は専ら次男のことを指す。無着という別名は、後述するように、大乗仏教の空思想を会得したことにちなむ。(空(空性)とは執著の無いことを意味する。)
- 小乗の空観をも体得した無着は、インド中部のアヨーディヤー(現在のアウド)に赴き、大乗仏教の修行の一つである瑜伽行に努め、大乗仏教徒となった。そこで弥勒(マイトレーヤ)から大乗仏教の空思想を学んだ。
- 他の人々にも、弥勒が直接『瑜伽師地論(ゆがしじろん)』(『十七地経』)を説くように要請し、無着がその解説をすることにした。これが唯識思想流布の端緒とされる。
- 晩年には、大乗を誹謗する世親をアヨーディヤーに呼び寄せ、転向させた。

世親

- 世親(せしん、वसुबन्धु vasubandhu)は、古代インドの仏教僧である。世親とは、サンスクリット名である「ヴァスバンドウ」の新訳名である。旧訳(くやく)名は、「天親」(てんじん)。
- 初め部派仏教の説一切有部を学び、有部一の学者として高名をはせた。ところが、兄の無著から大乘仏教を勧められ、下らない教義を聞いていたと自らの耳をそいで、瑜伽行唯識学派に入ったといわれている。その後、唯識思想を学び体系化することに努めた。
- 浄土真宗では、七高僧の第二祖とされ「天親菩薩」と尊称される。
- 『唯識三十頌』- 後に多くの論師によって注釈書が作られ、唯識の基本的論書となる。
- • 『無量寿経優婆提舍願生偈』(『浄土論』・『往生論』) - 後に曇鸞が、『浄土論註』を撰述し、本書を再註釈する。日本の浄土教において、もっとも重要な論書とされる。

中国に最初に伝えたインド僧

- 竺法蘭：中国に初めて仏教を伝えたといわれる伝説上の僧。インドの人で、後漢の明帝の頃、西域から招かれて洛陽に至ったという。
- 迦葉摩騰：《(梵)Kāśyapamātāṅga》インドの仏僧。竺法蘭(じくほうらん)とともに、中国に初めて仏教をもたらし、67年、洛陽の白馬寺に住し、四十二章経を訳したと伝えられる。生没年未詳。

中国語に最初に翻訳した人

- 安世高:安息国では、部派仏教に属する説一切有部が流行していたため、世高は禅観の法や阿毘達摩に通じていた。桓帝代の建和2年(148年)に、都の洛陽に来朝した。その後、20年にわたって訳経を行い、30部余りの経典を漢訳した。訳出経典は、『四諦経』『転法輪経』『八正道経』『安般守意経』など34部40巻に達したといわれる。いずれも小乗経典に属するものである。
- 支婁迦讖:月氏国(クシャーナ朝)の出身で、13部27巻の大乗経典を訳出している。訳出仏典の中でもっとも重要なものが『小品般若経』の異訳の『道行般若経』である。これは、般若経典類最初の訳出である。また、『般舟三昧経』の訳出によって、初めて中国に阿弥陀仏が紹介されたことも、中国仏教にとって大きなエポックとなった。

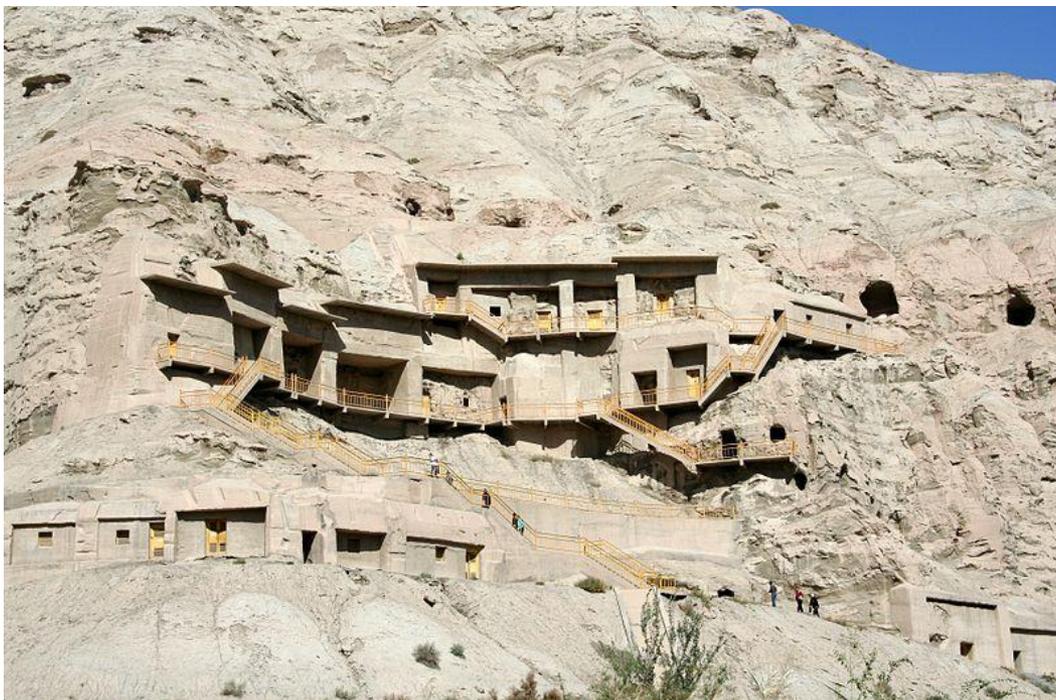
中央アジアから37人の翻訳者

- [安世高](#)、パルティア人の王子で最初にアビダルマ仏典を漢訳した(148年–170年)ことで知られる
- [支婁迦讖](#)、[クシャナ](#)人で最初に[大乘](#)仏典を漢訳した(167年–186年)
- [安玄](#)、パルティアの商人で、181年に中国で出家した
- [支曜](#)(185年頃)、クシャナ人の仏僧で、支婁迦讖に次ぐ[訳経僧](#)第二世代である
- [康孟詳](#)(194年–207年)、[康居](#)出身者では最初の訳経僧
- [支謙](#)(220年–252年)、クシャナ人僧侶で祖父が168–190年に中国に移住した
- [Zhi Yueh](#)(230年)、[建業](#)で活動したクシャナ僧
- [康僧会](#)(247年–280年)、現代の[ハノイ](#)周辺で中華帝国の最南端だった[交趾](#)出身で、ソグド人商人の息子
- [曇諦](#)(254年頃)、パルティア人の僧侶で『曇無徳羯磨』を漢訳した。
- [帛延](#)(259年頃)、[亀茲](#)の王子
- [竺法護](#)(265年–313年)、クシャナ人で一族は代々敦煌に居住していた
- [An Fachiin](#)(281年–306年)、パルティア系の僧侶
- [室利蜜多羅](#)(317年–322年)、[亀茲](#)の王子
- [鳩摩羅什](#)(401年頃)、[亀茲](#)の僧侶で最も有名な訳経僧の一人
- [仏図澄](#)(4世紀)、中国宮廷で顧問となった中央アジア人の僧侶
- [達磨](#)(440年–528年)、[楊衒之](#)によれば、中央アジア系の僧侶で、楊衒之は520年頃に[洛陽](#)で彼と出会ったという。達磨は[禪宗](#)の開祖であった。
- [闍那崛多](#)(あるいは志徳、(561年–592年)、ガンダーラ出身の訳経僧
- [実叉難陀](#)(652年–710年)、ガンダーラ地方ウディヤーナ出身の訳経僧
- [般若](#)(810年頃)カーブル出身の訳経僧で日本の[空海](#)に[サンスクリット](#)を教えた

2世紀頃のアジア



出典：イラストでわかる「やさしい仏教」
成美堂出版P94



キジル千仏洞

キジル(克孜尔)郷にある仏教石窟寺院の遺跡群。キジル千仏洞、キジル石窟寺院とも呼ばれ、新疆では最大の石窟である。

「キジル(Qizil)」とは、ウイグル語で「赤い」という意味であり、この辺一帯の赤い岩肌になんだもの。石窟のある岩山はかなりの凹凸があり、高さは5、60メートルもある。その中腹から下方にかけて石窟が掘られている。崖の中央には小さな溪谷が崖面と直角にあってその奥にも石窟が掘られている。

建築方法や壁画はその多くがインドやペルシア風である。



第1様式(第1期)の壁画

出典: <http://dsr.nii.ac.jp/rarebook/04/o/04.jpg>



第2様式
(第2期)
の壁画

出典: <http://dsr.nii.ac.jp/rarebook/04/o/05.jpg>



ベゼクリク

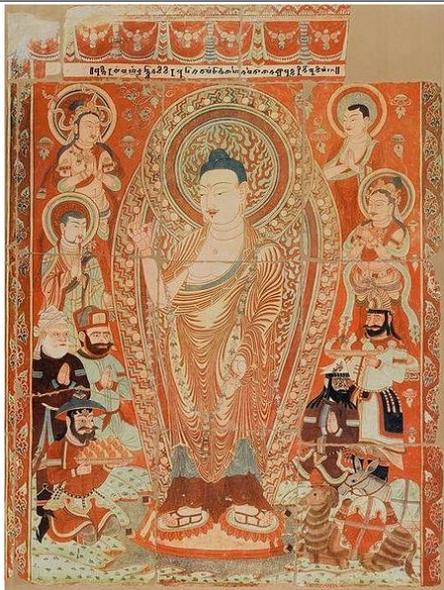
ベゼクリク千仏洞とは中国火焰山周辺にある、高昌の遺跡付近の楼蘭とトルファンの中ほどに位置する5世紀から14世紀にまで遡る仏教石窟。ベゼクリク千仏洞には77の石窟が存在する。

その大部分はしばしば四つの部分に分けられたアーチ状の天井を持つ長方形の空間になっており、それぞれに仏陀の壁画が描かれている。その効果は天上全体を数百の仏陀の壁画で覆っている。

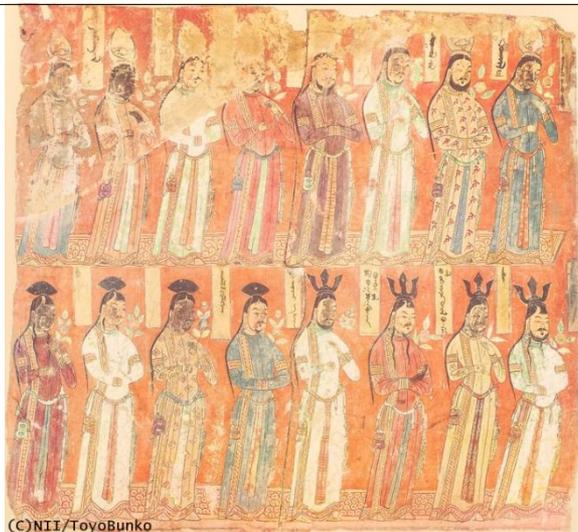
壁画の中には、インド人、ペルシア人、ヨーロッパ人などの様々な人物が大きく描かれたブッダを囲んでいる構図のものもある。

出典 : http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%AB:Bezelik_Caves_01.jpg

出典 : <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%AB:Turpan-bezeklik-desierto-d03.jpg>



出典 <http://dsr.nii.ac.jp/rarebook/01/o/bez10.jpg>



男性寄進者図
ウイグル人王侯貴族

誓願図
第二十号窟第九寺院



毘沙門天図

出典: <http://dsr.nii.ac.jp/rarebook/01/o/bez06.jpg>

仏教伝来

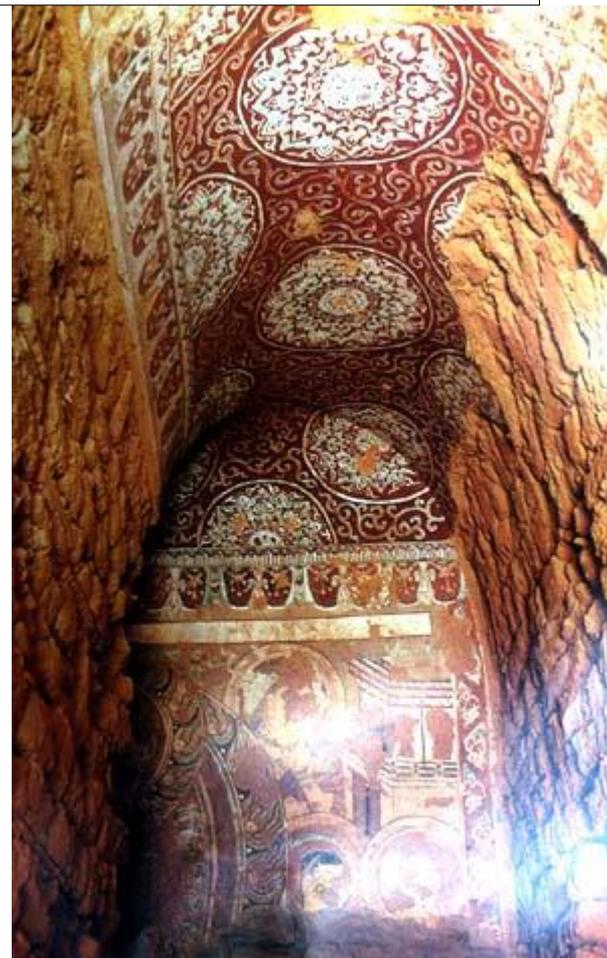
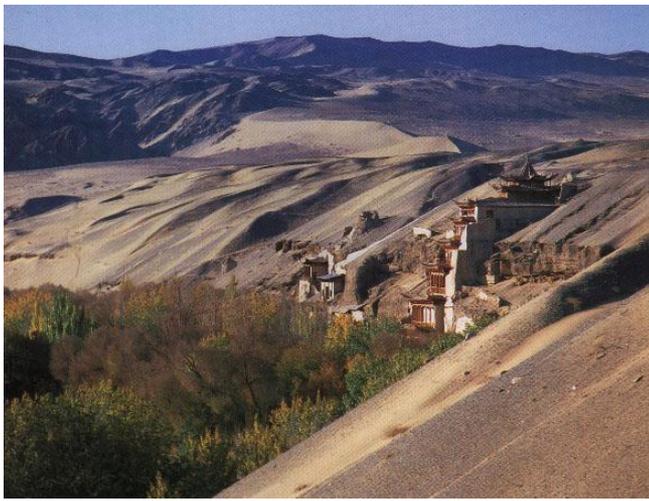


写真5. 4号窟の回廊。9号窟の回廊も、
このように華麗であったことだろう

第4号窟回廊

出典: <http://www.geocities.jp/qbj485/Y-silk/Y-beze.htm>

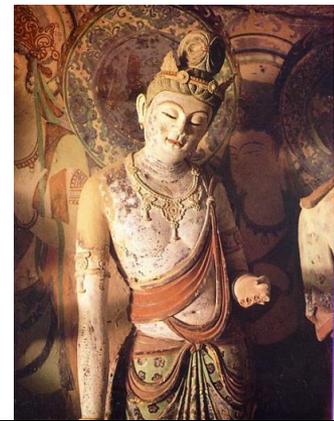
ベゼクリク千仏洞壁画



出典: <http://blogs.yahoo.co.jp/sakurai4391/30291509.html>



出典: http://www.cazoo.jp/blog/archives/2010/10/post_1977.html



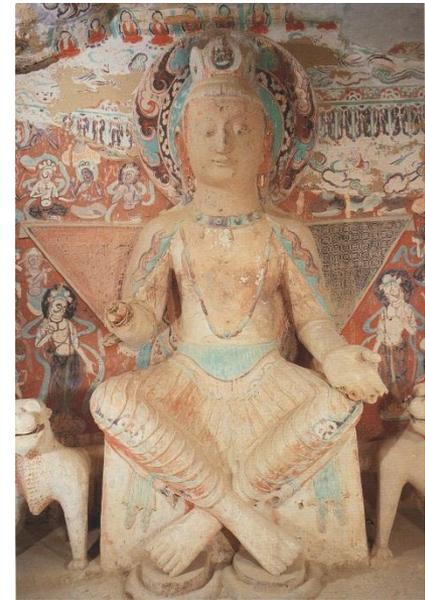
出典: NHK取材班の「シルクロード第2巻」敦煌より



七尊像 45窟西壁龕 出典:
<http://avantdoublier.blogspot.jp/2012/11/blog-post.html>



出典: <http://www.miryokuxian.com/wallpaper.asp>



275窟・交脚弥勒菩薩 出典:
<http://www.7a.biglobe.ne.jp/~xx20/275koukyakumiroku.jpg>

莫高窟は南北1.6km
現存石窟は492窟
4世紀から14世紀まで
の約1,000年造り続け
られた

敦煌莫高窟

北の大仏殿



出典:
<http://blogs.yahoo.co.jp/sakurai4391/30343747.html>



45窟・観世音菩薩普門品 出典:
<http://avantdoublier.blogspot.jp/2012/11/blog-post.html>

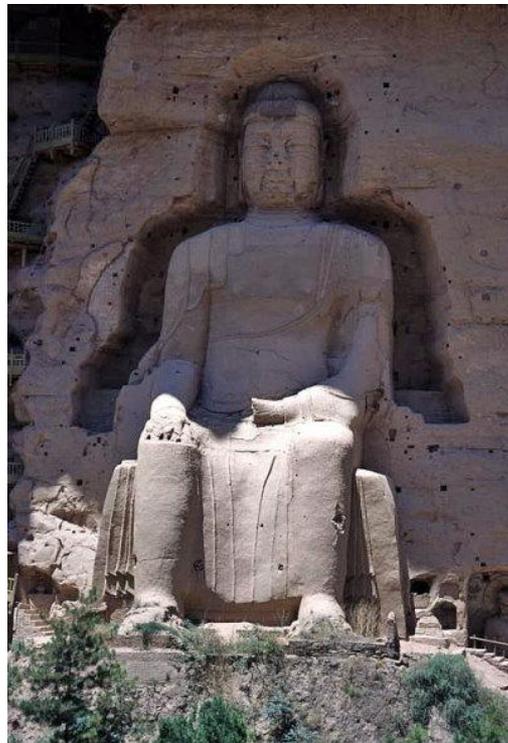
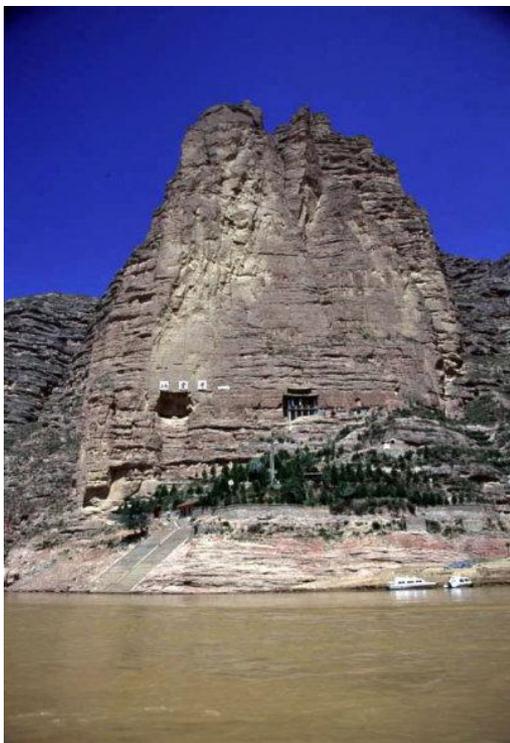


249窟・伏斗式天井 出典:
http://avantdoublier.blogspot.jp/2008/11/blog-post_25.html

敦煌市の東南25kmに位置する鳴沙山(めいささん)の東の断崖に南北に1,600mに渡って掘られた莫高窟・西千仏洞・安西榆林窟・水峡口窟など600あまりの洞窟があり、その中に2400余りの仏塑像が安置されている。壁には一面に壁画が描かれ、総面積は45,000平方メートルになる。

壁画の様式としては五胡十六国北涼、続く北魏時代には西方の影響が強く、仏伝・本生譚・千仏などが描かれ、北周・隋唐時代になると中国からの影響が強くなり、『釈迦説法図』などが描かれるようになる。期間的に最も長い唐がやはり一番多く225の窟が唐代のものと推定され、次に多いのが隋代の97である。

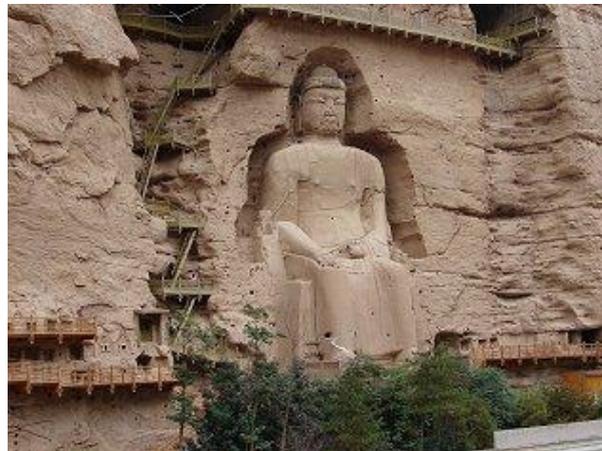
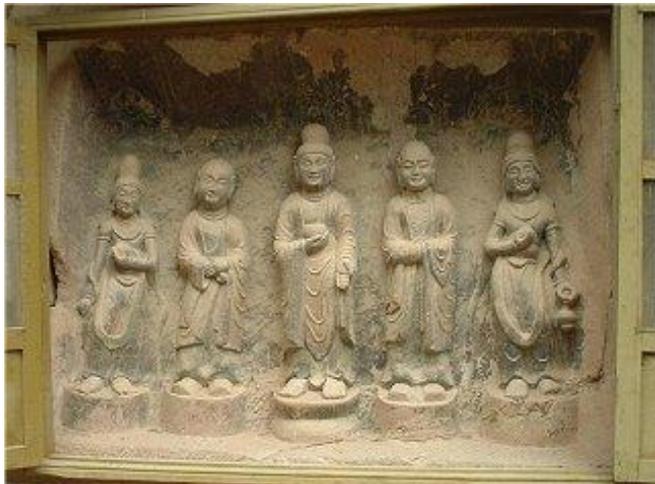
敦煌莫高窟



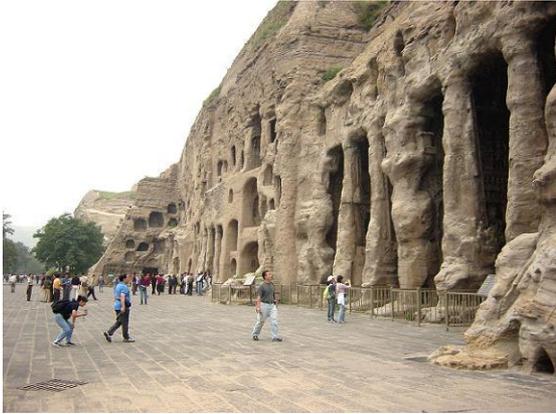
炳靈寺石窟

中国の甘肃省永靖県の西約50km, 黄河上流の小積石山にある紅砂岩の仏教石窟。〈炳靈〉は, チベット語で〈十万仏〉を意味する。岩壁には190あまりの石窟があり、大小700体近くの大仏像が残されているが、なかでも最も有名な大仏は171龕にある唐時代の大仏で、最も古い大仏は壁に「西秦建弘元年」(420年)と記された第169窟である。

出典: <http://www.ne.jp/asahi/y-sakai/fukui/sub34.html>



出典: <http://ww5.tiki.ne.jp/~ym-arita/05lanzhou2.htm>



雲崗石窟

雲崗石窟は、山西省大同市の西方20kmに所在する、東西1kmにわたる約40窟の石窟寺院。

様式上は、最初期の「曇曜五窟」には、ガンダーラやグプタ朝の様式の影響が色濃い。その後の石窟ではギリシア様式の唐草文様に代表される西方起源の意匠も凝らされており、当時の建築様式を模した装飾も豊富に見られる。



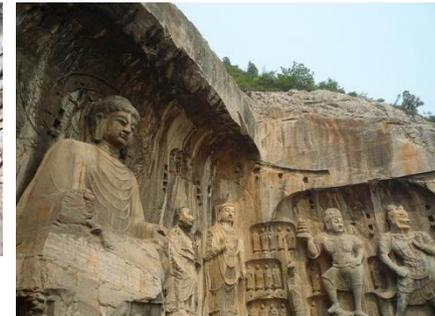
出典: <http://www.saray.co.jp/chinacave.html>

出典: <http://blog.goo.ne.jp/usuaomidori/e/b71064081fe81b84aef59fbd7bdb09d3>



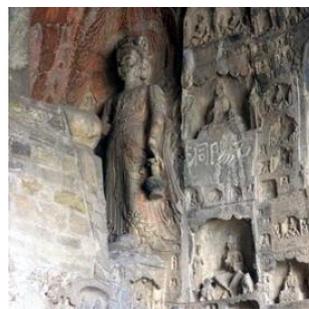
出典: <http://www.bell.jp/pancho/travel/china-1/unko%20sekkutsu.htm>

龍門石窟



出典: <http://dlift.jp/photo/photoDisplayWorldHeritage163>

出典: <http://www5b.biglobe.ne.jp/~tanzawa/ryuumon/ryuumon.htm>



出典: <http://www.takamatsu-u.ac.jp/univ-jrcol/dept/blog/?p=245>

龍門石窟(りゅうもんせつくつ)は河南省洛陽市の南方13キロ、伊河の両岸にある石窟寺院。494年(太和18年)に始まる。仏教彫刻史上、雲岡石窟の後を受けた、龍門期(494年 - 520年)と呼ばれる時期の始まりである。

様式上の特徴は、面長でなで肩、首が長い造形であり、華奢な印象を与える点にある。また、中国固有の造形も目立つようになり、西方風の意匠は希薄となる。

釈尊の実践的認識

- 弟子マールンキャプッタ青年の問い
※世界の永遠性・生命と肉体・死後の運命・世界の有限と無限など **形而上学的課題の解決**に悩み、答えが得られなければ**修行を放棄**して家に帰ると釈尊に迫った。
- 釈尊の反問
※**毒矢に射られて苦しんでいる人**の友人が医者を呼んでいる時に、当人が**私を射たものは誰か、その者の名は**、背丈は、肌の色は、用いた弓は、その弦は、などの事が判らない間、**この矢を抜き取ることはまかりならぬと言った**としたらどうなるであろうか。彼は答えを得る前に死んでいくだろう。同じようにマールンキャプッタよ、お前の問いに答えが得られなければ修行をやめるといふのであれば、**お前は答えを得ることなくこの世を去らねばならない**であろう。
- 釈尊が青年の問いを拒否した理由。
青年の設問が「救済」にとって無益だから。釈尊の立場は明瞭。救済に関係のない難問にはかかわらない。彼のメッセージは、心の痛みに苦しむ者に向けられている。**「苦」からの解放。これが釈尊の教えの根幹。釈尊の認識に向かう姿勢はあくまでも実践的。**「苦」からの解放の道を求める者にのみ、釈尊の教説は存在する。苦しみからの解放を求めない者は釈尊にとって**「縁無き衆生」**なのである。
出典：「仏教の受容と変容・東南アジア編」石井米雄編集、(株)佼成出版社、p31-32

四諦八正道

- 釈尊の出発点は「苦」であった。四諦とは、転法輪経に説かれているが、
 - 1.苦聖諦。(八苦:生老病死、愛別離苦、怨憎会苦、求不得苦、五取蘊苦)
 - 2.苦集聖諦。(苦の原因:いたるところで喜び楽しもうとする渴愛欲求)
 - 3.苦滅聖諦。(苦を滅する真理:渴愛を残りなく滅離し、捨て、脱し無執着となる)
 - 4.苦滅道聖諦。(滅に至る理想の道:八支聖道{正見・正思惟・正語・正業・正命・正精進・正念・正定})

苦・・凡夫の現実の状態……病状

集・・現実の苦の原因……病因

滅・・自覚ある理想状態……健康体の状態

道・・理想への手段・方法……治病健康法

肉体の病気を治す
医者論理と同様

出典: 仏教要語の基礎知識、水野弘元著、(株)春秋社、p176-179,184-186

- 五取蘊苦(ごしゅうんく): 煩悩に伴われた人間そのものの苦しみ。五蘊とは色・受・想・行・識という蘊(集まり)
- 正見(しょうけん): 正しい見方・見解、日常生活では何か事業をなす場合の全体計画・見通し、
正思惟(しょうしゆい): 正しい意思・決意、自分の立場を常に正しく考えて意思すること
正語(しょうご): 正しい言語的行為・妄語・悪口を言わない、正業(しょうごう): 正しい身体的行為・善行をなす事、
正命(しょうみょう): 正しい生活法・規則正しく、正精進(しょうしょうじん): 正しい努力・勇気、理想に向かって努力する
正念(しょうねん): 正しい意識・注意・理想目的を常に忘れない事、日常生活でもうっかり・ぼんやりしない事
正定(しょうじょう): 正しい精神統一・心を静め精神を集中させる

東南アジアの仏教

- **歴史的仏教**

現在は宗教的遺構でのみ存在が確認される仏教

※中部ジャワのポロブドゥール遺跡(サンスクリット系大乘仏教)

※カンボジアのアンコール遺跡群(クメールの大乘仏教)

- **現代仏教**には2系統がある

※**スリランカ系の上座仏教**; ミャンマー(ビルマ)、タイ、ラオス、カンボジア、ベトナム南部の一部で盛ん

※**中国系の大乗仏教**; ベトナムに陸路伝えられた(但し儒教・道教を合わせた「三教」の一つとして受容)

- 上座仏教とはパーリ語のテーラヴァーダ=「長老たちを通じて連綿と伝承されてきた仏陀の正統的教説」という誠に誇り高い名称(小乗仏教と言うべきでない) 出典: 仏教の受容と変容・東南アジア編p13-15

スリランカ

- BC3Cにデーヴァーナンプiyaティッサ王が上座仏教に改宗し、臣下・民衆に広がる
- スリランカは南インドのタミル勢力の侵略動向で盛衰あり
- BC1Cにヴァッタガーマニー王が大乗仏教を受容し、AD12Cまで並立し対立
- AD5C頃諸外国と交易活発で上座仏教も東南アジアに伝承
- AD12Cにヴィッジャヤバーフ王が仏教の復興のためビルマから経典と長老を招請
- AD1153年マラッカマバーフ1世が上座仏教(マハーヴィハーラ派)を唯一の正統派と定めた。
- AD16Cポルトガルの植民地に、17Cにオランダの、19Cにイギリスの植民地となる。この間に仏教も衰退した。
- 18Cにタイから更にはビルマの仏教サンガから長老を招請し仏教の再興を図る
出典: 仏教の受容と変容東南アジア編、石井米雄編、(株)佼成出版社p16-18

ミャンマー(ビルマ)

- 仏教伝来時期特定は困難、AD5C頃と推定されるビュー遺跡にパーリ語碑文あり。
- AD11Cアノーヤター王がビルマを統一し、スリランカ所伝の上座仏教を公的宗教に採用
- その後、**国王が仏教教団と相即不離の関係**を構築し仏教国家と呼びうる統治体制が成立。
- 13C末に元の侵攻でパガン王国が滅亡、サンガも**衰退**
- 1476年下ビルマ王ダンマゼーディがスリランカに使節を派遣、伝統の**復興**を図る
- **1871年**ミンドン王が乱れた経と律を整備するため「**第5結集**」の開催を後援した。これは2度のイギリスとの戦いで植民地化される危機を宗教的イデオロギーの高揚により政治的統合力を強化するために行ったと推定される。
- 19C末にイギリスが植民地化し王政が崩壊するまで仏教国家体制は続く。
- 第2次大戦後独立したビルマのウーヌ首相が**1954年から2年間**、「**第6結集**」を開催し、仏教の理想の実現を目指す社会主義政府の立場を示した。
出典：仏教の受容と変容東南アジア編、石井米雄編、(株)佼成出版社p19-21

タイ

- 13C前半にスコータイ王国がタイ中部に建設されタイ人国家が成立。
- 1292年の「ラーマカムヘン王刻文」に国王から庶民まで上座仏教が信奉されている様子が記述されている。
- 14C中葉に成立したアユタヤ王国でも上座仏教は王政を支える重要な存在。ただし首都アユタヤは国際色豊かな港町でキリスト教イスラム教なども共存。
- 18C中葉のポロマコート王はスリンカにウパーリ長老他を派遣、復興を援助。
- アユタヤ王国崩壊後乱れた国内の宗教的秩序回復の為、現ラタナコーシン王朝始祖のラーマ1世は**1788年タイ式に数えて「第9結集」**を首都バンコクで開催。この時に製作された三蔵経典は「大黄金版三蔵経」と呼ばれる。更に出家者の持戒を厳しく監視し、破戒僧に還俗を命じた。
- 1902年「**サンガ統治法**」制定し全国の寺院と僧を首都の大長老会議の統制下に置いた。現在に至るまでタイの僧は**中央集権的な統一サンガを離れて存在不可能**である。政府後援の教理試験と資格付与は仏教経典の解釈の幅を狭め、**宗教的活力をタイ仏教から奪っている**。

出典：仏教の受容と変容東南アジア編、石井米雄編、(株)佼成出版社p21-23

カンボジア

- 9C～12Cにアンコール遺跡群で代表されるヒンドゥ教と大乘仏教文化が栄える。
- 13Cにタイ人勢力が勃興しクメール人版図は縮小。やがてスリランカ系の上座仏教が浸透。13C末に元の周達観記述の「真臘風土記」に首都アンコールでの上座仏教信奉の様子「釈迦一仏のみが祀られ」との文言がある。
- 15Cにはタイの圧力はさらに強まり、アンコールを放棄しプノンペンと河港都市に移動。16Cにプノンペンを訪れたポルトガル人宣教師は高さ30メートルの金色の仏塔が聳えていたと報告。
- 18Cにはさらにタイの影響が強まる。フランスがカンボジアを保護下(1863-1953)に置いた時、タイの影響を除くことに意を用いた。
- **ポルポト政権下で徹底的な弾圧を受ける。現在の穏健派政権は仏教を積極的に復活させ政治的安定に役立てようとしている。**

出典：仏教の受容と変容東南アジア編、石井米雄編、(株)佼成出版社p24,28

上座仏教の現状

- 東南アジアで約1億人が信奉
 - スリランカ:人口の67%;約1千万人。政府のサンガに対する統制は極めて弱くサンガの自立性は大きい。
 - ミャンマー:約3千万人。1980年ネーウィン政権が中央集権的仏教組織を目指す法案を成立させる。これでサンガに対する規制強化を行っている。
 - タイ;人口の95%;5千2百万人。サンガの集積度が最も高い。一人のサンカラート(法王)の統制下にサンガは属している。
 - カンボジア:推定人口の85%;約6百万人
 - ラオス:推定人口の50-60%;2~2.5百万人。タイに倣った中央集権組織があるが、タイよりサンガの集積度は弱い。
- 出典:仏教の受容と変容東南アジア編、石井米雄編、(株)佼成出版社p26-28

釈尊の真理(上座仏教から)

- 釈尊の教えは判り易く、実践し易い教えではない。
「難行」であり、「**達人の教え**」と呼ばれる知的エリートにして初めて実践することが可能な教えである。
- 救済の二法。全ての宗教は何らかの意味で「**救済**」を説く。
その**救済が誰によってもたらされるか**を基準にすると二つの流れがある。
※一つは自らの力を一切否定し去り**絶対者**に身を任せる。仏教では親鸞。キリスト教では信仰のみによる救済を説くマルチン・ルターの立場。
※もう一つは、**自己の努力**によって救済が達成される。ダンマパダ(法句経)は絶対自力の教説の代表。
- パーリ語で書かれた法句経160では (友松円諦訳)
己こそおのれの寄る辺 己をおきて誰に寄る辺ぞ
よく調べし己こそ まこと得難き寄る辺をぞ得ん
自分の拠り所は自分自身である。自己を救済する者は自己自身以外にない。
英訳者は「寄る辺」をSaviour = 救済者と訳す。
救済を目指す者は「よく調べし己」(自己を調えるための努力を払わねばならない)。
これこそが釈尊の教説の原点、上座仏教の出発点。
出典: 仏教の受容と変容東南アジア編、石井米雄編、(株)佼成出版社p29-30

上座仏教のあるべき形と現実の姿Ⅱ

- 存在の構造
「苦」の原因は、存在の構造とそれに対する人間の誤った認識にある。
- 釈尊はすべての形成されたものは**無常**である、と言う。
この世に存在する一切の物は造物主の創造物ではない。さまざまな原因や条件が相和して形成されたもので、**絶えず移り変わって刹那といえどもとどまる事がない**。滅び行くことをその本質としている。
- 人間はこうした存在の**真実の構造**をあるがまま見ることなく、常住を願い、失われたものをみては、嘆き悲しむ。**不変なる我**という存在を信じて、これに**執着**して、とどまることを知らない。
- この結果人間は**渴愛という盲目的・衝動的な欲望**が起こり、「むさぼり」「いかり」「おろかさ」という煩惱の炎となって人間の心を焦がす。これが「苦」の原因。
- 人間がこの真理を悟れば煩惱の炎は吹き消され「ねはん」の境地に入り、再びこの迷いの境涯に戻ることはない。**「ねはんに入る」とは天国や極楽に行くことではない**。煩惱の炎が**真実の認識**によって吹き消されることを意味する。
出典：仏教の受容と変容東南アジア編、石井米雄編、(株)佼成出版社p35

上座仏教のあるべき形と現実の姿Ⅲ

- 真実の認識への道
いかにして存在への「無知」を「知」に転換するか。
「知」獲得の方法論は「八正道」。これを単純化したのが、「三学」=「戒・定・慧」。
- 「戒」とは心身の調整。規則正しく放逸に陥らない生活態度を堅持し、肉体と精神の双方を調えること。
- 「定」とは瞑想法の実践による「精神の統一」
- この二つの実践により人間は「最高の英知」を獲得できるというのが三学の要点。
- 方法論としての出家
この教えは日々の生業に心を煩わせる凡俗の人間には不可能な境地。実践するためには一切を放棄して修行に専心する必要がある、人間の再生産活動拠点の「家」を出た。「出家」である。しかし生きるためには食わねばならない。「在家」の存在と支援を前提としなければならない。
- 仏教成立以前からインド社会には宗教修行者を尊敬し生活の糧を供養して功德を得るという観念が存在していた。このため出家をする決意ができた。
出典：仏教の受容と変容東南アジア編、石井米雄編、(株)佼成出版社p36-37

上座仏教のあるべき形と現実の姿Ⅳ

- 民衆の仏教
上座仏教がエリート志向の宗教にも拘わらず**1億人の上座仏教徒が何故存在**できるのか？正統的教理とは別の凡俗の人にも魅力的な何かがあるのでは？
 - タイに住んだ英国人がよく仕事を休んでお寺参りをする使用人に「定めし来世は天国に生れて大天使になるだろう」と皮肉ると使用人は「とんでもない。天国には興味はありません。ねはんに入るのもお断り。**私はもう一度この世に戻って王様か大金持ちになって楽しく暮らしたい**」と言った。
 - 民衆の関心は古代インドから継承している輪廻転生の世界観の中で「**善因善果・悪因悪果**」による「**相対的な救済**」すなわちより多くの幸せを得ることを望む。
 - 幸福を願う者はすべからく「**楽しい結果を生む原因となる行為**」(パーリ語で**プンニャ**、タイ語で**ブン**=日本語では**功德**)を行わなければならないと考える。
 - タイ寺院の領収書。金品を寄進すると領収書が発行される。それには「**祝福の証し**」と書いてある。その下には「**この世の福田**」(=「サンガ」の意味)。
 - 日本でお寺に行くのは墓参り。タイではタンブン(=功德を積む)に行くという。
 - 「福田思想」こそ上座仏教を信奉する民衆の宗教行動をとく鍵である。
- 出典：仏教の受容と変容東南アジア編、石井米雄編、(株)佼成出版社p39-43

上座仏教のあるべき形と現実の姿 V

- **タンブンの諸相**

最も日常的に見られる「タンブン」の姿は**托鉢僧に食事**の寄進。

雨期明けには**カチナの衣(黄色衣)**の寄進。各地の寺院目指して飾り立てたバスなどでカチナの行列が続く。現在では寺院に不足している種々の品物をも寄進。**寺院を建立**しサンガに寄進するのは極めて大きな功德を生じる。国王や村単位。

- 上座仏教は**僧が結婚式にかかわるのを戒律をもって禁じている**。しかし式当日の午前中に僧を招いて読経を願い、食事を供養することが多い。節目に当たる儀式に入る前にまず「タンブン」を行い、事の成就を願う趣旨。同様に正月のタンブン、新築祝いのタンブン、開店祝いのタンブンなど。

- ありとあらゆる在家者の宗教活動が「功德を積む」という一点に集中すると正統的教義から考えも及ばない、「出家する」こと自体をタンブンととらえる思想が出てきた。毎年雨安居の期間に10日ほどの短期間出家することもタンブンのため。

- 日常生活で遭遇する「いま」の危機を「ここで」回避してくれるのは超自然的力、呪術的要求を上座仏教でも「**護呪經典**」として持っている。**大乘仏教の影響**がスリランカに6-7Cに影響した時に形成された儀礼と言われている。

- 「**ねはん志向型仏教**」を「**功德追求型仏教**」と「**呪術的仏教**」が**支える**構造である。

出典：仏教の受容と変容東南アジア編、石井米雄編、(株)佼成出版社p49-52

四諦八正道Ⅱ (パーリ經典)

- 比丘たち、とうとい真実としての苦(苦諦)とはこれである。つまり、生まれることも苦であり、病むことも苦である。悲しみ、嘆き、苦しみ、憂い、悩みも苦である。憎いものに会うのも苦であり、愛しいものと別れるのも苦である。欲求するものを得られないのも苦である。要するに、人生のすべてのもの—それは執着をおこすもとである五種類のものの集まり(五取蘊)として存在するが—それがそのまま苦である。
- 比丘たち、とうとい真実としての苦の生起の原因(集諦)とはこれである。つまり、迷いの生涯をくりかえすもととなり、喜悅と欲情とをともなって、いたるところの対象に愛着する渴欲である。すなわち、情欲的快樂を求める渴欲と、固体の存続を願う渴欲と権勢や繁栄を求める渴欲である。
- 比丘たち、とうとい真実としての苦の消滅(滅諦)とはこれである。つまり、その渴欲をすっかり離れること、すなわちその止滅である。その棄捨であり、その放棄であり、それから解放されることであり、それに対する執着を去ることである。
- 比丘たち、とうとい真実としての苦の消滅に進む道(道諦)とはこれである。つまり、八項目から成るとうとい道、すなわち、正しい見解、正しい思考、正しい言葉、正しい行為、正しい暮らし、正しい努力、正しい心くばり、正しい精神統一である。(桜部建訳「相応部」)
出典: 仏教の受容と変容東南アジア編、石井米雄編、(株)佼成出版社p33-34

中国での受容と変容 I

- 儒家の倫理思想と仏教經典
- 仏教の**出世間主義**と儒家の**世間的秩序**を重視する現世主義とは原則的に相容れるものではなく、対立的立場にあった。
- 初期の漢訳經典で儒家の孝に基づく家族倫理の影響を強く受けた經典に「**六方礼経**」。在家信者の実生活の指針を述べたものとして南方仏教では重要視。
- 東南西北が父母、師、妻、友人に、上下が沙門・バラモン、使用人に当たる。
- パーリ語原文では自分はそれぞれに「**奉仕する**」、それぞれは自分を愛することが説かれている。しかし当時の中国社会の通念では「夫は妻に奉仕する」「主人は使用人に奉仕する」などは考えられない。パーリ文では**夫・主人が下位**にいる。
- 「六方礼経」では「夫は妻を視る」「大夫は奴客・婢使を視る」と訳す。「**視**」とは、**いたわる、世話をする**の意味であり、**夫・主人が上位で妻・使用人は下位**に考える。
- 家族関係の倫理はインドでは仏教特有のものでなく、**インド思想全般**のもの。この点は**中国の家族倫理と著しく異なっている**。儒家の礼教主義に合わせて原文を**改変**し中国人向けの經典が製作されることがあった。儒家のみならず老荘の影響を受けたものもある。

出典：仏教の受容と変容中国編、鎌田茂雄編、(株)佼成出版社p75-76

中国での受容と変容 II

- 中華思想との相剋
- 中華・中夏と言われる中国本土(中原)は世界の中心であり、中原以外は辺境の地として蔑む考えがあった。一方仏典の中に「世界の中央はインドのカピラヴァストゥ(迦維羅衛)である」とあり、漢民族には受け入れがたいものであった。
- 西晋が匈奴の侵入で滅亡後、華北の覇者となった羯族の後趙王石虎が仏教を受入れ「自分は辺地の生れであり、仏は戎の神である、故にこれに従う」と言う。
- 暦法に通じていた何承天は文献「周礼」に「地中は八尺の柱の影が1尺5寸になる所」とあるが、インドでは「夏至の正午には影がなくなる」と聞いて舌を巻いた。中国が世界の中心ではないと仏教側が主張する理論的根拠となっていた。
- 出家
- 儒家の「孝経」で「身体髪膚之を父母に受く。敢えて毀傷せざるは孝の始めなり。身を立て道を行い、名を後世に揚げ、以って父母を顕かにするは孝の終わりなり。」仏教に批判的な者は前半を採り、出家生活は親に対する孝を真っ向から否定し、剃髪は父母に受けた髪を傷つけるもの。一方仏教側は後半を採り、立身して道を行い名声を博して父母を顕揚することこそが孝の要点と言う。
出典：仏教の受容と変容中国編、鎌田茂雄編、(株)佼成出版社p77-79,p82-83

中国での変容と受容Ⅲ

- 広律の受容と変容
- AD5C初め広律の伝記。7Cの唐代には四分律宗が成立し、以降中国の律講究の主流となる。そしてインドには実体として存在しない新しい律が作り上げられた。7C後半にインドに渡った義浄は中国の律の誤りを指摘している。しかし、中国的律の一つ南山律宗は鑑真により日本に伝えられるなど中国的に変容し確立した。
- 唐代以降に作られた禪宗特有の生活規定である「清規」では、インドにおいて生産活動の一切を禁じられていた出家僧が自ら労働し、自給自足の僧院生活をすることが定められるのも中国における変容の一例。
- 孟蘭盆会
- 中国での変容の象徴的なもの。
AD538年同泰寺で7月15日に行われたのが最古の記録。道教の中元節に習合した。形の上では道教と同一日だが、思想史の上では儒家の孝の思想を仏教が取り入れたもの。「孟蘭盆経」はサンスクリットもチベット訳もなく、偽経と考えられる。
- 内容は目連尊者が仏の教えに従い衆僧に食物などの布施をし、餓鬼世界に堕ちて苦しむ母を救ったという儒家の「孝」の考えに連なるもの。
出典：仏教の受容と変容中国編、鎌田茂雄編、(株)佼成出版社p77-79,p87-89

中国での受容と変容Ⅳ

- 輪廻と神滅神不滅
- 中国人が最も奇異に感じた一つが輪廻・応報であった。現在の日本人が生前の人間の延長としての魂の存在を自明なものと考えているのは中国で形成された中国仏教の影響が多少ともある。
- 漢訳された経典に「神」という語が用いられている。原典では神・心・魂やインドで古来説かれるアートマン(我)を意味する語である。漢訳の神は魂に当たる。魂が死後、肉体を離れても存在し続けるか(神不滅)、存在しなくなるか(神滅)について中国では後漢(AD1C)以来六朝の終わり(6C)まで論じ続けられた。
- BC5C前の中国では「神」は不可知な自然の力を表し、人の外にあるもの崇拝される対象。時代が下がるにつれ目に見えない心の働きを司る意味も持つように。BC3C頃には気・精・鬼・魂・魄・霊或いは精神・魂気・魂鬼などが神と同様の意味で用いられ、「**気があれば則ち生、気なくば則ち死**」(「管子」枢言篇)に代表されるように生と死を分かつものを意味するようになる。**気と神は精を介して結びつき**、本来的に気とは別物である神が形から離れることが死と考えられた。
- 輪廻とは仏教のみならず汎インド的な概念で人は悟りを得ない限り永遠に迷いの世界を経巡っていくと考えられていた。東晋の慧遠は「沙門不敬王者論」第5編の「形尽神不滅」で形から離れた神の存在と転生輪廻が事実であることを主張する。**不老長寿を求めていた道家**に対してこの世は一つのステップで、**生まれ変わり次の生があるのだ**と仏教は説いた。

出典：仏教の受容と変容中国編、鎌田茂雄編、(株)佼成出版社p90-95

義浄

- 義浄(ぎじょう、635年(貞観9年) - 713年(先天2年))は唐の僧。
- 齊州(山東省済南市)の人である。幼くして出家し、15歳の時(649年(貞観23年))には西域行を志し、法顕や玄奘の行跡を思慕していたという。
- 671年(咸亨2年)、37歳で番禺県(広東省)を同志数十名とともに出発しようとしたが、余人は全て辞退したため、義浄一人、海路でインドへ渡り、鹿野苑や祇園精舎を巡拝した。帰路も再び海路で、マレー・インドネシア(スマトラ島にあったシュリーヴィジャヤ王国の中心都市パレンバンなど)を経て、695年(証聖元年)帰国。25年間に30余国を遊歴し、400部、50万頌のサンスクリットの経律論、金剛座、舍利300粒などを齎した。
- 武則天は、自ら洛陽の上東門外に出迎え、勅によって仏授記寺に迎え入れた。以後、仏典の漢訳を行う。訳経は国家事業として洛陽・長安の大寺や内道場で行なわれ、実叉難陀・阿曇真那・波崙らの西域渡来の僧が訳経を担当し、武則天自らが序を著した。漢訳された経典は56部230巻に及んだ。また、『南海寄帰内法伝』、『大唐西域求法高僧伝』を著す。両著とも、当時のインドや中国の仏教研究、あるいはインドや東南アジアの社会状況に関する貴重な史料となっている。
- 713年(先天2年)、79歳で亡くなった。

朱士行

- 朱士行(しゅしぎょう)は、中国・三国魏の仏教者。インド・西域からの渡来人や渡来僧が中心であった、3世紀当時の仏教界にあって、中国人として最初に出家した人物である。洛陽に曇柯迦羅が来朝し、出家修道の儀礼を整えた。その際に、中国人で最初に出家受戒したのが、朱士行である。とされる。
- その後、士行は『道行般若経』を講経していたが、その訳経の不十分なことによって、意味が理解できない箇所を発見した。それで、完本を中国に将来する必要性を痛感し、西域への求法の旅に出ることを決意した。
- 260年、雍州(陝西省西安市)を出立し、于闐(ホータン市)にまで到達した。そこで、「二万五千頌般若経」(Pañcaviṃśatisāhasrikā-prajñāpāramitā sutra)の原典を得ることができ、弟子の弗如檀に命じて中国に将来させた。
- 291年、竺叔蘭がその般若経を漢訳し、『放光般若経』と名づけた。一方、士行の方は、遂に帰郷することなく、于闐にて亡くなった。

法顕

- 法顕(ほっけん、337年(咸康3年) - 422年(永初)3年)は、中国東晋時代の僧。姓は龔、平陽郡武陽縣(今の山西省)の人。
- 幼くして出家、20歳で具足戒を受けた。その人となりは「志行明敏、儀軌整肅なり」といわれた。
- 仏教の学究を進めるにしたいがい、經典の漢語訳出にくらべて戒律が中国仏教界において完備しておらず、経律ともに錯誤や欠落があるのをなげき、399年(隆安3年)、慧景、慧応、慧嵬、道整等の僧と共に長安からインドへ求法の旅にたった。途中ホータン王国を經由しつつ6年かかって中インド(中天竺)に達し、王舎城などの仏跡をめぐり、『摩訶僧祇律』、『雑阿毘曇心論』などをえて、さらにスリランカにわたり、『五分律』、『長阿含経』などをもとめた。413年(義熙9年)海路で青州(今の山東省)へ帰国したが、帰国できたのは法顕のみであった。彼の記した旅行記を『仏国記』(別名、『法顕伝』、『歴遊天竺記伝』。英語とフランス語に翻訳されたものが存在)といい、当時の中央アジアやインドに関して書かれた貴重な史料となっている。
- 建康で仏陀跋陀羅に出会い、法顕が持ち帰った『大般涅槃経』等が訳出され、涅槃宗成立の基となった。『摩訶僧祇律』40巻も訳された。法顕は荊州の辛寺で没した。享年86。没後、『五分律』も仏馱什が訳した。

玄奘三蔵①

- 玄奘三蔵(げんじょうさんぞう、602年 - 664年3月7日)は、唐代の中国の訳経僧である。玄奘は戒名であり、俗名は陳禕(チンイ)。尊称は三蔵法師。鳩摩羅什と共に二大訳聖、あるいは真諦と不空金剛を含めて四大訳経家とも呼ばれる。
- 629年に陸路でインドに向かい、巡礼や仏教研究を行って645年に経典657部や仏像等を持って帰還。大唐西域記はその時の旅行記である。以後、翻訳作業で従来の誤りを正し、法相宗の開祖となった。
- 武徳5年(622年)、21歳の玄奘は成都で具足戒を受けた。ここまで行動を共にしていた長捷は、成都の空慧寺に留まることになったので、玄奘はひとり旅立ち、商人らに混じって三峡を下り、荊州の天皇寺で学んだ。その後も先人を求めて相州へ行き、さらに趙州で『成実論』を、長安の大覚寺で『俱舍論』を学んだ。
- 玄奘は、仏典の研究には原典に拠るべきであると考え、また、仏跡の巡礼を志し、貞観3年(629年)、隋王朝に変わって新しく成立した唐王朝に出国の許可を求めた。しかし、当時は唐王朝が成立して間もない時期で、国内の情勢が不安定だった事情から出国の許可が下りなかったため、玄奘は国禁を犯して密かに出国、役人の監視を逃れながら河西回廊を経て高昌に至った。
- 高昌王である麴文泰は、熱心な仏教徒であったことも手伝い、玄奘を金銭面で援助した。玄奘は西域の商人らに混じって天山北路を辿って中央アジアの旅を続け、ガンジス川を越えてインドに至った。
- ナーランダ大学では戒賢に師事して唯識を学び、また各地の仏跡を巡拝した。ヴァルダナ朝の王ハルシャ・ヴァルダナの保護を受け、ハルシャ王へも進講している。

玄奘三蔵②

- こうして学問を修めた後、天山南路を経て帰国の途につき、出国から16年を経た貞観19年1月(645年)に、657部の經典を長安に持ち帰った。
- 幸い、玄奘が帰国した時には唐の情勢は大きく変わっており、時の皇帝・太宗も玄奘の業績を高く評価したので、16年前の密出国の件について玄奘が罪を問われることはなかった。
- 帰国した彼は、持ち帰った膨大な梵經の翻訳に専念した。太宗の勅命により、玄奘は、貞観19年(645年)2月6日に弘福寺の翻經院で翻訳事業を開始した。この事業の拠点は後に大慈恩寺に移った。
- さらに、持ち帰った經典や仏像などを保存する建物の建設を高宗に進言し、652年、大慈恩寺に大雁塔が建立された。
- その後、玉華宮に居を移したが、翻訳はそのまま続けた。麟徳元年2月5日(664年3月7日)、玄奘は玉華宮で寂した



玄奘三蔵像

出典:

http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%AB:Xuanzang_w.jpg

(東京国立博物館蔵 鎌倉時代 重文) 仏教伝来

韓国の仏教

- 朝鮮半島への仏教の伝来は、高句麗へは372年(小獸林王2年)に伝来し、百濟へは384年(枕流王元年)に伝来、新羅では528年(法興王14年)に公認された。五胡十六国時代から南北朝時代の中国から伝えられ、これら三国においてはその後の律令制度の整備に伴い、国家建設の理念としての役割を果たすようになった点が特徴的である。特に新羅においては、護国仏教としての性格が強いのが特徴で、唐の侵攻に対し先頭に立って人民に徹底抗戦を促して、新羅の朝鮮半島統一に大きな影響を与えた。この時代の仏教は、三論宗、律宗、涅槃宗がまず伝わり、次に円融宗、華嚴宗、法性宗が伝わった。この他、主なものに法相宗、小乗宗、海東宗、神印宗などがあつた。
- 統一新羅の時代にも中国に渡る僧は続き、末期にかけて唐から禪が伝来した。特に新羅第40代の哀莊王の時代(808年)には、法朗が禪宗四祖道信の教えを伝え、813年(憲康王5年)には、曹溪南禪系の馬祖道一の門下である智道の教えを道義が伝えた。
- 後三国時代を経て、朝鮮半島には高麗王朝が立つが、この時代にも仏教は保護された。しかし、新しく伝えられた禪と、従来から存在する教宗は、次第に対立する様相も呈した。
- 禪とともに教学も同等に重視する教義が中心となって続いた。今に伝わる高麗八萬大藏經が編纂されたのもこの頃で、モンゴル帝国の侵攻により危機感を抱いた天台宗およびそれを支持する上流階級が主に事業を推進した。一方、曹溪宗の僧侶は山に入り、参禪と学習にいそしむようになった。
- 李氏朝鮮時代に入ると、一転して儒教が国教となつたため、仏教は徹底的に弾圧された。初期には王族の保護を受けたが、士林派の集権で弾圧が強化された。僧は都の漢陽に入ることを禁止された上、賤民階級に身分を落とされた。また、全国に1万以上もあつた寺院は、国家的に保護を受けるべきものが242寺に限定され、その他の寺院は所有地と奴婢を没収され、また多くが破壊された。
- 大韓民国の成立以後、韓国国内の仏教教団では日本の影響を受けた妻帯に対する批判が起こり、暴力をも伴う激しい比丘・帯妻紛争が起き、比丘宗団は曹溪宗などに、妻帯する帯妻宗団は太古宗などに分立した。
- 一方、キリスト教が勢力を拡大する中で仏教の信者数は減少した。

崇仏論争

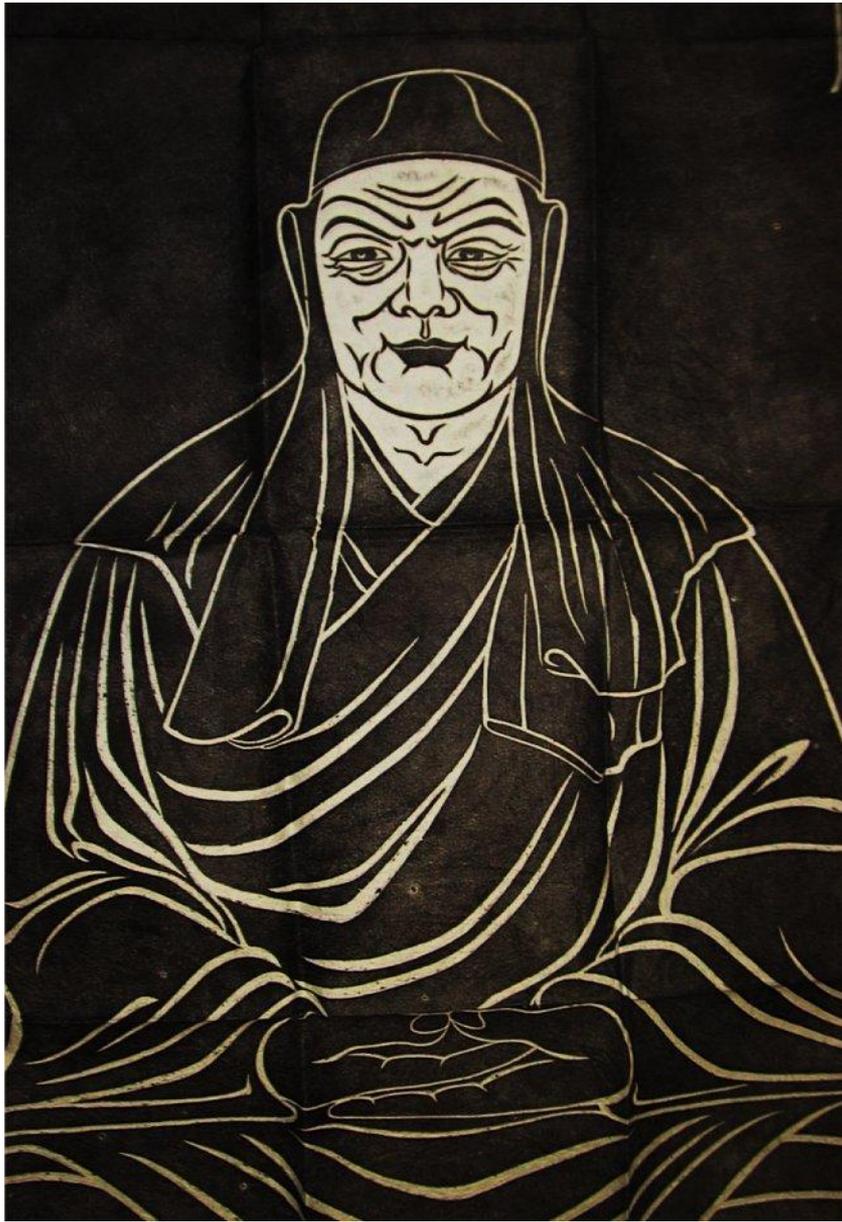
- 大和朝廷の豪族の中には原始神道の神事に携わっていた氏族も多く、物部氏・中臣氏などはその代表的な存在であり、新たに伝来した仏教の受容には否定的であったという。いっぽう大豪族の蘇我氏は渡来人勢力と連携し、国際的な視野を持っていたとされ、朝鮮半島国家との関係の上からも仏教の受容に積極的であったとされる。
- 欽明天皇は百済王からの伝来を受けて、特に仏像の見事さに感銘し、群臣に対し「西方の国々の『仏』は端巖でいまだ見たことのない相貌である。これを礼すべきかどうか[7]」と意見を聞いた。これに対して蘇我稲目は「西の諸国はみな仏を礼しております。日本だけこれに背くことができますでしょうか[8]」と受容を勧めたのに対し、物部尾輿・中臣鎌子らは「我が国の王の天下のもとには、天地に180の神がいます。今改めて蕃神を拝せば、国神たちの怒りをかう恐れがあります[9]」と反対したという(崇仏・廃仏論争)。意見が二分されたのを見た欽明天皇は仏教への帰依を断念し、蘇我稲目に仏像を授けて私的な礼拝や寺の建立を許可した。しかし、直後に疫病が流行したことをもって、物部・中臣氏らは「仏神」のせいで国神が怒っているためであると奏上。欽明天皇もやむなく彼らによる仏像の廃棄、寺の焼却を黙認したという。
- 以上が通説であるが、近年では物部氏の本拠であった河内の居住跡から、氏寺(渋川廃寺)の遺構などが発見され、神事を公職としていた物部氏ですらも氏族内では仏教を私的に信仰していた可能性が高まっており、同氏を単純な廃仏派とする見解は見直しを迫られている。結局のところ、崇仏・廃仏論争は仏教そのものの受容・拒否を争ったというよりは、仏教を公的な「国家祭祀」とするかどうかの意見の相違であったとする説や、仏教に対する意見の相違は表面的な問題に過ぎず、本質は朝廷内における蘇我氏と物部氏の勢力争いであったとする説も出ており、従来の通説に疑問が投げかけられている。

鑑真①

- 鑑真(がんじん、旧字体:鑑眞、中国語繁字体:鑒眞、中国語簡字体:鉴真、Jiàn zhēn 688年(持統天皇2年) - 763年6月25日(天平宝字7年5月6日))は、奈良時代の帰化僧。日本における律宗の開祖。俗姓は淳于。
- 鑑真と戒律:唐の揚州江陽県の生まれ。14歳で智満について得度し、大雲寺に住む。18歳で道岸から菩薩戒を受け、20歳で長安に入り、翌年弘景について登壇受具し、律宗・天台宗を学ぶ。律宗とは、仏教徒、とりわけ僧尼が遵守すべき戒律を伝え研究する宗派であるが、鑑真は四分律に基づく南山律宗の継承者であり、4万人以上の人々に授戒を行ったとされている。揚州の大明寺の住職であった742年、日本から唐に渡った僧栄叡、普照らから戒律を日本へ伝えるよう懇請された。奈良には私度僧(自分で出家を宣言した僧侶)が多かったため、伝戒師(僧侶に位を与える人)が必要であり、聖武天皇は優秀な僧侶を捜していた。
- 仏教では、新たに僧尼となる者は、戒律を遵守することを誓う必要がある。戒律のうち自分で自分に誓うものを「戒」といい、サンガ内での集団の規則を「律」という。戒を誓うには、10人以上の正式の僧尼の前で儀式(これが授戒である)を行う必要がある。これら戒律は仏教の中でも最も重要な事項の一つとされているが、日本では仏教が伝来した当初は自分で自分に授戒する自誓授戒が行われるなど、授戒の重要性が長らく認識されていなかった。しかし、奈良時代に入ると、戒律の重要性が徐々に認識され始め、授戒の制度を整備する必要性が高まっていた。栄叡と普照は、授戒できる僧10人を招請するため渡し、戒律の僧として高名だった鑑真のもとを訪れた。
- 栄叡と普照の要請を受けた鑑真は、渡日したい者はいないかと弟子に問いかけたが、危険を冒してまで渡日を希望する者はいなかった。そこで鑑真自ら渡日することを決意し、それを聞いた弟子21人も随行することとなった。その後、日本への渡海を5回にわたり試みたがことごとく失敗した。

鑑真②

- 752年、必ず渡日を果たす決意をした鑑真のもとに訪れた遣唐使藤原清河らに渡日を約束した。しかし、当時の玄宗皇帝が鑑真の才能を惜しんで渡日を許さなかった。そのために753年に遣唐使が帰日する際、遣唐大使の藤原清河は鑑真の同乗を拒否した。それを聞いた副使の大伴古麻呂は密かに鑑真を乗船させた。11月17日に遣唐使船が出航、ほどなくして暴風が襲い、清河の大使船は南方まで漂流したが、古麻呂の副使船は持ちこたえ、12月20日に薩摩坊津の秋目に無事到着し、実に10年の歳月を経て仏舎利を携えた鑑真は宿願の渡日を果たすことができた。
- 日本での戒律の確立:753年(天平勝宝5年)12月26日、鑑真は大宰府観世音寺に隣接する戒壇院で初の授戒を行い、754年(天平勝宝6年)1月には平城京に到着し聖武上皇以下の歓待を受け、孝謙天皇の勅により戒壇の設立と授戒について全面的に一任され、東大寺に住することとなった。4月、鑑真は東大寺大仏殿に戒壇を築き、上皇から僧尼まで400名に菩薩戒を授けた。これが日本の登壇授戒の嚆矢である。併せて、常設の東大寺戒壇院が建立され、その後761年(天平宝字5年)には日本の東西で登壇授戒が可能となるよう、大宰府観世音寺および下野国薬師寺に戒壇が設置され、戒律制度が急速に整備されていった。
- だが、鑑真と朝廷の蜜月はこの時がピークだった。鑑真は僧侶を減らす為に来日したのではない。正しく仏法を伝えた上で、多くの僧を輩出するつもりだった。彼は全国各地に戒壇を造る為に仏舎利を3000粒も持参していた。一方、朝廷の本心は税金逃れの出家をストップさせること。両者の思惑は対立し、758年、鑑真は大僧都を解任され東大寺を追われた。鑑真は自分が財源増収のため朝廷に利用されたことを知る。あの命をかけた渡航や栄叡の死は何だったのか。「こんなハズでは…」既に70歳。海を渡って唐に戻る体力はなかった。
- 759年(71歳)、そんな鑑真の境遇を知った心ある人が、彼に土地を寄進してくれた。鑑真は私寺となる『唐招提寺』を開き戒壇を造る。「招提」は“自由に修行する僧侶”という意。この非公式な戒壇で授戒を受けても、国からは正規の僧とは見なされなかったが、鑑真を慕う者は次々と寺にやって来た。



鳩摩羅什:クマーラジーヴァ

一部の經典において、大胆な創作や意識の疑いが指摘されるものの、彼の翻訳によって後代の仏教界に与えた影響は計り知れない。

東アジアの仏教は、鳩摩羅什によって基本的に性格づけられ方向づけられたと
いってよい。

主な訳出経論に『坐禪三昧經』3巻、『阿彌陀經』1巻、『大品般若經』24巻、『妙法蓮華經』7巻、『維摩經』3巻、『大智度論』100巻、『中論』4巻などがある。門弟は三千余人に上ったという。

『法華經』には六訳三存とあって、古来6種の漢文への訳出があり、

- (1)『正法華經』(286年訳出) 竺法護訳
- (2)『妙法蓮華經』(406年訳出) 鳩摩羅什訳
- (3)『添品妙法蓮華經』(601年訳出) 闍那崛多・達摩笈多訳の3種が現在に伝わっている。

なかでも、鳩摩羅什が訳した『妙法蓮華經』は名訳であり、『法華經』のなかでも圧倒的に流布した。『法華經』といえ一般に『妙法蓮華經』をさす。

じゆきやう

儒教

〈儒教〉紀元前五世紀頃、孔子を創始とする儒家思想が、後に中国思想の中心となる儒教を作っていった。

● 儒家の中心思想は

孝 子が親に持つ敬愛の気持ち



仁 孝を他人にまで広げたもの



礼 仁の表現としての礼儀



● **孟子** — 「人は生まれながらに善」

● **墨子** (かつて儒家と同様に人気)
「兼愛」 — 差別のない人類愛
「非攻説」 — 攻める側に味方せず

● **道家** — あるがまま「無為自然」
紀元前四世紀頃
老子・荘子が祖

巴=道の陰陽を表す

儒教と道教

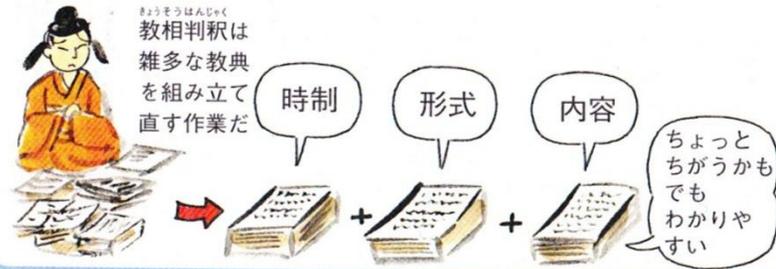
教相判釈の方法

諸経典を読み込んで分析し、ブツダが行なつたとされる説法の順序や内容、形式などに従つて、教えの特徴や優劣を判定する。

天台に住む智顛 (538-598) が行なつた教相判釈「五時八教」は天台宗のもととなった。

「五時」 — 「～を説いたとき」というように経過ごとに時制をつける

「八教」 — 「化儀の四教」 説法の仕方・教え方・対機などの形式ごとに四つに分類
「化法の四教」 説法の内容によって四つに分類



多数の経典から釈尊の最終的な教えを探す
教相判釈(各宗の教義の根幹となる)

儒教・仏教・道教は中国の三大宗教

外来宗教は仏教以外にゾロアスター教・ネストリウス派キリスト教・マニ教などが5-7世紀に流入したが定着せず。

出典: イラストでわかる「やさしい仏教」
成美堂出版P98,99

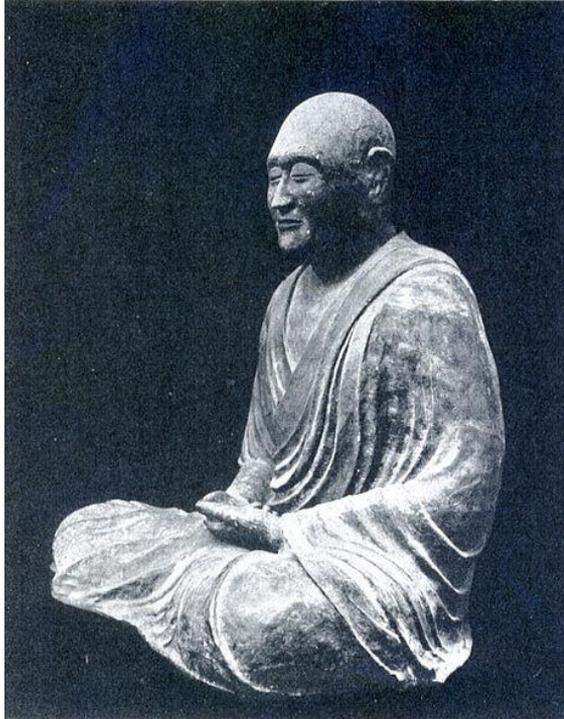
偽経

- 偽経(ぎきょう)、あるいは疑経とは、中国において、漢訳された仏教経典を分類し研究する際に、インドまたは中央アジアの原典から翻訳されたのではなく、中国人が漢語で撰述したり、あるいは長大な漢訳経典から抄出して創った経典に対して用いられた、歴史的な用語である。中国撰述経典という用語で表現される場合もあるが、同義語である。
- 偽経あるいは疑経として認定された経典類は、経録中で「疑経類(偽経類)」として著録され、それらは大蔵経に入蔵されることはなかった。それに対して、正しい仏典として認定されたものは真経として、大蔵経の体系を形成することとなった。
- しかしながら、偽経あるいは疑経と認定され、大蔵経に入蔵されなかったとは言え、これらの経典群が消え去ることはなかった。むしろ、盛んに読誦され、開版されて、今日まで伝わる経典は数多い。『父母恩重経』、『盂蘭盆経』、『善悪因果経』など、今日も折本形式で発売されている偽経類は、多く見られる。
- 老子化胡経 - 西晋の王浮作とされる偽経。
- 梵網経 - 5世紀頃中国の大乗仏教の偽経。
- 延命十句観音経
- 大梵天王問仏決疑経 - 禅宗の根拠とされる経典。
- 十一面観世音菩薩随願即得陀羅尼経 - 日本で編纂された。

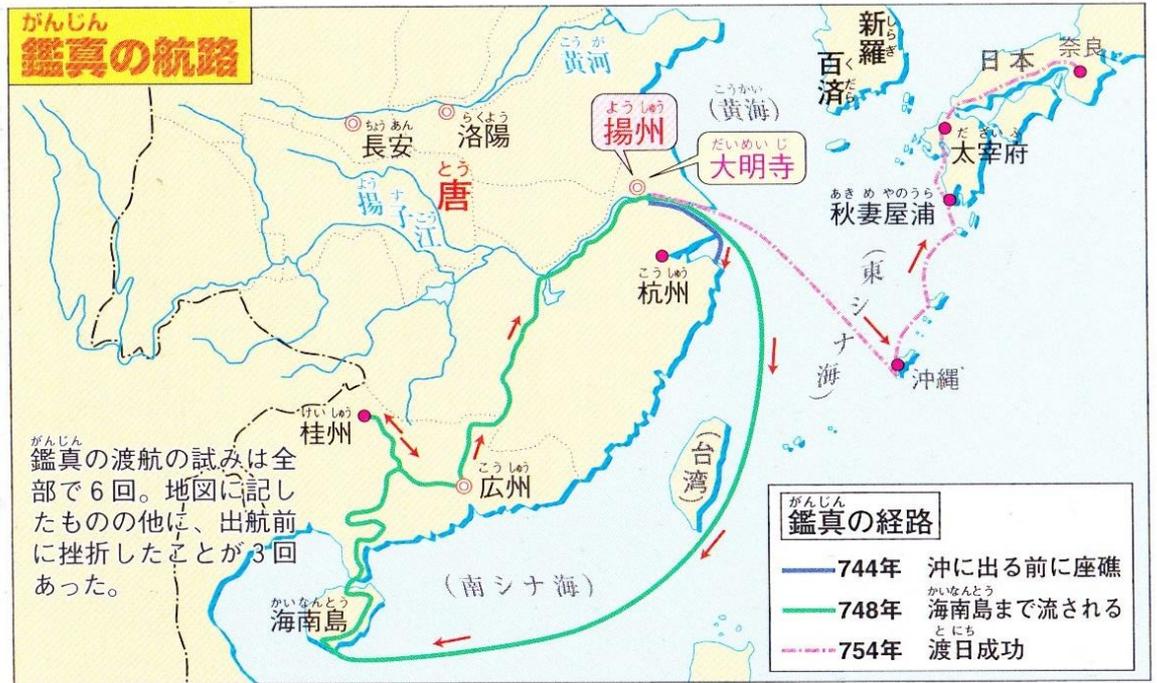
遣唐使 Kento-shi



出典：
http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%AB:Kentoshi_route.png



鑑真和上像



鑑真和上の航路

出典：
http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%AB:Ganjin_wajyo_portrait.JPG

出典：イラストでわかる「やさしい仏教」
 成美堂出版P131

遣隋使

- 遣隋使(けんずいし)とは、推古朝の倭国(倭國)が隋に派遣した朝貢使のことをいう。600年(推古8年)～618年(推古26年)の18年間に5回以上派遣されている。なお、日本という名称が使用されたのは遣唐使からである。
- 大阪の住吉大社近くの住吉津から出発し、住吉の細江(現・細江川)から大阪湾に出、難波津を経て瀬戸内海を九州へ向かい、そこから玄界灘に出る。
- 倭の五王による南朝への奉獻以来約1世紀を経て再開された遣隋使の目的は、東アジアの中心国・先進国である隋の文化の摂取が主であるが、朝鮮半島での影響力維持の意図もあった。この外交方針は次の遣唐使の派遣にも引き継がれた。
- 第二回は、『日本書紀』に記載されており、607年(推古15年)に小野妹子が大唐国に国書を持って派遣されたと記されている。
- 倭王から隋皇帝煬帝に宛てた国書が、『隋書』『東夷傳倭國傳』に「日出處天子致書日沒處天子無恙云云」(日出ずる処の天子、書を日没する処の天子に致す。恙無しや、云々)と書き出されていた。これを見た煬帝は立腹し、外交担当官である鴻臚卿(こうろけい)に「蕃夷の書に無礼あらば、また以て聞するなかれ」と命じたという。無礼な蕃夷の書は、今後自分に見せるな、というのである(「帝覽之不悅 謂鴻臚卿曰 蠻夷書有無禮者 勿復以聞」)。
- なお、煬帝が立腹したのは倭王が「天子」を名乗ったことについてであり、「日出處」「日沒處」との記述にではない。「日出處」「日沒處」は『摩訶般若波羅蜜多經』の注釈書『大智度論』に「日出処是東方 日没処是西方」とあるなど、単に東西の方角を表す仏教用語である。ただし、仏教用語を用いたことで中華的冊封体制からの離脱を表明する表現であったとも考えられている。
- 小野妹子は、その後返書を持たされて返されている。煬帝の家臣である裴世清を連れて帰国した妹子は、返書を百済に盗まれて無くしてしまったと言明している(「臣參還之時 唐帝以書授臣 然經過百濟國之日 百濟人探以掠取 是以不得上」『日本書紀』)。百済は日本と同じく南朝への朝貢国であったため、その日本が北朝の隋と国交を結ぶ事を妨害する動機は存在する。しかしこれについて、煬帝からの返書は倭国を臣下扱いする物だったのでこれを見せて怒りを買う事を恐れた妹子が、返書を破棄してしまったのではないかと推測されている。

遣唐使

- 遣唐使(けんとうし)とは、当時の日本(倭国)が唐に派遣した使節である。日本側の史料では唐の皇帝と対等に交易・外交をしていたとされるが、『旧唐書』や『新唐書』の記述においては、「倭国が唐に派遣した朝貢使」とされる。中国では619年に隋が滅び唐が建ったので、それまで派遣していた遣隋使に替えてこの名称となった。寛平6年(894年)に菅原道真の建議により停止された。
- 遣唐使の目的: 海外情勢や中国の先進的な技術や仏教の経典等の収集が目的とされた。旧唐書には、日本の使節が、中国の皇帝から下賜された数々の宝物を市井で全て売って金に替え、代わりに膨大な書物を買って帰国していったと言う話が残されている。
- 第一次遣唐使は、舒明天皇2年(630年)の犬上御田鍬(いぬかみのみたすき)の派遣によって始まった。本来、朝貢は中国の皇帝に対して年1回で行うのが原則であるが、以下の『唐書』の記述が示すように、遠国である倭国の朝貢は毎年でなくてよいとする措置がとられた。
- その後、唐僧維躅(ゆいけん)の書に見える「二十年一來」(20年に1度)の朝貢が8世紀ごろまでに規定化され、およそ十数年から二十数年の間隔で遣唐使の派遣が行われた。
- 遣唐使は200年以上にわたり、当時の先進国であった唐の文化や制度、そして仏教の日本への伝播に大いに貢献した。

源信

- 源信(げんしん)は、平安時代中期の天台宗の僧。恵心僧都(えしんそうず)と尊称される。
- 浄土真宗では、七高僧の第六祖とされ、源信和尚[1]、源信大師と尊称される。
- 天曆4年(950年)、信仰心の篤い母の影響により9歳で、比叡山中興の祖慈慧大師良源(通称、元三大師)に入門し、止観業、遮那業を学ぶ。
- 天曆9年(955年)、得度。
- 天曆10年(956年)、15歳で『称讚浄土経』を講じ、村上天皇により法華八講の講師の一人に選ばれる。そして、下賜された褒美の品(布帛<織物>など)を故郷で暮らす母に送ったところ、母は源信を諫める和歌を添えてその品物を送り返した。その諫言に従い、名利の道を捨てて、横川にある恵心院(現在の建物は、坂本里坊にあった別当大師堂を移築再建)に隠棲し、念仏三昧の求道の道を選ぶ。
- 寛和元年(985年)3月、『往生要集』脱稿する。
- 長和3年(1014年)、『阿弥陀経略記』を撰述。
- 寛仁元年6月10日(1017年7月6日)、76歳にて示寂。臨終にあたって阿弥陀如来像の手に結びつけた糸を手にして、合掌しながら入滅した。
- 浄土真宗の宗祖とされる親鸞は『高僧和讃』において、「源信大師」10首を作成し称讚している。

良忍

- 良忍(りょうにん、延久5年1月1日(1073年2月10日)? - 天承2年2月1日(1132年2月19日))は、平安時代後期の天台宗の僧で、融通念仏宗の開祖。聖応大師。
- 比叡山東塔常行三昧堂の堂僧となり、雑役をつとめながら、良賀に師事、不断念仏を修める。また禅仁・観勢から円頓戒脈を相承して円頓戒の復興に力を尽くした。22歳から23歳のころ京都大原に隠棲して念仏三昧の一方で、来迎院・浄蓮華院を創建し(寂光院も良忍による創建説がある)、また分裂していた天台声明の統一をはかり、大原声明を完成させた。
- 1117年(永久5年)阿弥陀仏の示現を受け、「1人の念仏が万人の念仏に通じる」という自他の念仏が相即融合しあうという立場から融通念仏を創始し、称名念仏で浄土に生まれると説き、結縁した人々の名を記入する名帳を携えて各地で勧進を行った。四天王寺に参籠した時に見た霊夢により、摂津国住吉郡平野庄(現大阪市平野区)の領主の坂上広野の邸宅地に開いた修楽寺が、その後の融通念仏の総本山の大念仏寺の前身である。
- 1773年(安永2年)聖応大師の諡号を賜った。

法然

- 法然(ほうねん、長承2年(1133年) - 建暦2年(1212年))は、平安時代末期から鎌倉時代初期の日本の僧である。はじめ山門(比叡山)で天台宗の教学を学び、承安5年(1175年)、専ら阿弥陀仏の誓いを信じ「南無阿弥陀仏」と念仏を唱えれば、死後は平等に往生できるという専修念仏の教えを説き、のちに浄土宗の開祖と仰がれた。
- 『選択本願念仏集』(『選択集』)を著すなど、念仏を体系化したことにより、日本における称名念仏の元祖と称される。
- 浄土宗では、善導を高祖とし、法然を元祖と崇めている。
- 浄土真宗では、法然を七高僧の第七祖とし、法然上人・源空上人と称し、元祖と位置付ける[注釈 4]。親鸞は、『正信念仏偈』や『高僧和讃』などにおいて、法然を「本師源空」や「源空聖人」と称し、師事できたことを生涯の喜びとした。
- 承安5年(1175年)43歳の時、善導の『観無量寿経疏』(『観経疏』)によって回心を体験し、専修念仏を奉ずる立場に進んで浄土宗を開き、比叡山を下りて東山吉水に住んで、念仏の教えを広めた[3]。この年が浄土宗の立教開宗の年とされる。法然のもとには延暦寺の官僧であった証空、隆寛、親鸞らが入門するなど次第に勢力を上げた[3]。
- 元久2年(1205年)の興福寺奏状の提出が原因のひとつとなって承元元年(1207年)、後鳥羽上皇により念仏停止の断が下された。
- 法然は還俗させられ、「藤井元彦」を名前として土佐国(実際には讃岐国)に流罪となった。なお、親鸞はこのとき越後国に配流とされた。
- 承元元年(1207年)12月に赦免されて讃岐国から戻った
- 建暦2年(1212年)1月25日、京都東山大谷(京都市東山区)で死去した。

道元

- 道元(どうげん)は、鎌倉時代初期の禅僧。日本における曹洞宗の開祖。晩年に希玄という異称も用いた。同宗旨では高祖と尊称される。
- 徒(いたずら)に見性を追い求めず、座禅している姿そのものが仏であり、修行の中に悟りがあるという修証一等、只管打坐の禅を伝えた。『正法眼蔵』は、和辻哲郎、ハイデッガーなど西洋哲学の研究家からも注目を集めた。
- • 成仏とは一定のレベルに達することで完成するものではなく、たとえ成仏したとしても、さらなる成仏を求めて無限の修行を続けることこそが成仏の本質であり(修証一如)、釈迦に倣い、ただ坐禅にうちこむことが最高の修行である(只管打坐)と主張した。
- • 鎌倉仏教の多くは末法思想を肯定しているが、『正法眼蔵随聞記』には「今は云く、この言ふことは、全く非なり。仏法に正像末(しょうぞうまつ)を立つ事、しばらく一途(いっと)の方便なり。真実の教道はしかあらず。依行せん、皆うべきなり。在世の比丘必ずしも皆勝れたるにあらず。不可思議に希有(けう)に浅間しき心根、下根なるもあり。仏、種々の戒法等をわけ給ふ事、皆わるき衆生、下根のためなり。人々皆仏法の機なり。非器なりと思ふ事なかれ、依行せば必ず得べきなり」と、釈迦時代の弟子衆にもすぐれた人ばかりではなかったことを挙げて、末法は方便説に過ぎないとして、末法を否定した。
- 道元は易行道(浄土教教義の一つ)には、否定的な見解を述べている

日蓮①

- 日蓮(にちれん)(貞応元年2月16日 - 弘安5年10月13日、ユリウス暦では1222年3月30日 - 1282年11月14日、グレゴリオ暦に換算すると1222年4月6日 - 1282年11月21日[1])は、鎌倉時代の仏教の僧。鎌倉仏教の宗旨のひとつ日蓮宗(法華宗)の宗祖。死後に皇室から日蓮大菩薩(後光厳天皇、1358年)と立正大師(大正天皇、1922年)の諡号を追贈された。
- 日蓮が文応元年7月16日(ユリウス暦で1260年8月24日[8])に得宗(元執権)北条時頼に提出した文書が立正安国論である。日蓮は、相次ぐ災害の原因は人々が正法である法華経を信じずに浄土宗などの邪法を信じていることにあるとして対立宗派を非難し、このまま浄土宗などを放置すれば国内では内乱が起こり外国からは侵略を受けると唱え、逆に正法である法華経を中心とすれば(「立正」)国家も国民も安泰となる(「安国」と主張した。
- その内容に激昂した浄土宗の宗徒による日蓮襲撃事件を招いた上に、禅宗を信じていた時頼からも「政治批判」と見なされて、翌年には日蓮が伊豆国に流罪となった。この事は「教えを広める者は、難に遭う」という『法華経』の言葉に合う為、「法華経の行者」としての自覚を深める事になった。
- しかし、時頼没後の文永5年(1268年)にはモンゴル帝国から臣従を要求する国書が届けられて元寇に至り、国内では時頼の遺児である執権北条時宗が異母兄時輔を殺害し、朝廷では後深草上皇と亀山天皇が対立の様相を見せ始めた。

日蓮②

- 日蓮とその信者は『立正安国論』をこの事態の到来を予知した予言書であると考えようになった。日蓮はこれに自信を深め、弘安元年(1278年)に改訂を行い(「広本」)、さらに2回『立正安国論』を提出し、合わせて生涯に3回の「国家諫暁」(弾圧や迫害を恐れず権力者に対して率直に意見すること)を行った。
- 『日蓮聖人註画讃』[編集]
- 一般信徒に向けた日蓮の伝記や書簡の整理は教団の拡大が進展する室町時代頃から本格的に始まる。室町時代、応仁の乱以降に日蓮宗の教勢拡大とともに教団内外の要請に応える形で各種の日蓮の伝記集が成立した。このうち『元祖化導記』と『日蓮聖人註画讃』が後代まで模範となる主要な日蓮伝の双璧となった。日朝の『元祖化導記』は日蓮の書簡を主要典拠として正しい日蓮の歴史像を明示しようという学究性の高い伝記であった。『元祖化導記』と時期を同じくして成立した円明院日澄(1441年－1510年)『日蓮聖人註画讃』はとりわけ日蓮の各種書簡と伝世された祖師伝説とを合わせて成立した絵巻による伝記であり、全国的な日蓮宗の布教網の拡大に合わせ、当時の日蓮宗徒や巷間に流布していた「超人的で理想的な祖師像」に合致した内容でもあった[11]。

ミリンダ王の問い(パーリ経典)1

- ある日の夕暮、王は五百の家臣らと共に車を連ねて白城を発し、サンケツヤという寺を訪う。それは先頃一人の尊い仏僧にして長老がここに寄宿したことを王が知ったからである。一行が寺に到着する頃には早や日も暮れて伽藍は暗夜に没し、ただ一条の篝火が出迎える長老と八千の比丘衆の影を敷石に長く揺らめかすばかりである。
- 王問うて曰く
- 「尊者よ、あなたは何者ですか」
- 「大王よ、私はナーガセーナとして知られています。比丘衆は私をナーガセーナと呼んでいます。しかしながら大王よ、これは名前に過ぎず、そこに人格的主体は存在しないのです」
- 「御参集の各位、五百のギリシャ人と八千の比丘衆よ、これなる人物ナーガセーナは『人格的主体は存在せぬ』などと申しますぞ。はたして是認してよかろうか」
- 王は向きなおり、再び問う
- 「尊者よ、もし人格的主体が認められぬとするならば、あなたに資物を寄進する者は誰ですか。それを受取る者は誰ですか。修行に励む者は誰ですか。尊者よ、もしそうであるならば、あなたを殺す者に殺人の罪はないのです。尊者よ、『ナーガセーナ』と呼ばれるものは何ですか。あなたの頭髪がナーガセーナなのですか」
- 「大王よ、そうではありませぬ」
- 「尊者よ、ではあなたの爪が、歯が、皮膚が、肉が、筋が、骨が、骨髄が、心臓が、汗が、脂肪が、涙が、唾液が、鼻汁が、小便が、頭蓋の中の脳髄がナーガセーナなのですか」
- 「大王よ、そうではありませぬ」
- 「そうではなくてと、では尊者よ、様態、感受、知覚、表象、認識の総体がナーガセーナなのですか」
- 「大王よ、そうではありませぬ」

ミリンダ王の問い(パーリ經典)2

- 「尊者よ、私はあなたに問いを重ねつつ、ナーガセーナの何たるかをいっかな合点できませぬ。ナーガセーナとは単なる名辞に尽きるのか。それにしてもこの際ナーガセーナとは何者か。尊者よ、あなたは事実無根の虚言をなされますぞ。『ナーガセーナは存在せぬ』などと」
- ナーガセーナ問うて曰く
- 「大王よ、もしやあなたが車でおいでになりましたのなら、それがしに車の何たるかを述べて下さいませ。大王よ、轆が車でしょうか」
- 「いや、尊者よ、そうではありませぬ」
- 「大王よ、では車軸が、車輪が、車室が、車台が、軛が、軛綱が、鞭打ち棒が車なのですか」
- 「いや、尊者よ、そうではありませぬ」
- 「そうではなくてと、ではそれら各部分とは別に車があるというわけですか」
- 「いや、尊者よ、そうではありませぬ」
- 「大王よ、私はあなたに問いを重ねつつ、車の何たるかをいっかな合点できませぬ。車とは単なる名辞に尽きるのか。それにしてもこの際車とは何たるか。大王よ、あなたは事実無根の虚言をなされますぞ。『車は存在せぬ』などと」
- 「御参集の各位、五百のギリシャ人と八千の比丘衆よ、これなる人物ミリンダ王は『車は存在せぬ』などと申しますぞ。はたして是認してよかろうか」
- 「尊者よ、それがしはうそ偽りをしゃべってはおりませぬ。車とは轆、車軸、車輪、車室、車台に依存して、名のみのもので成立するのでございます」
- 「よくこそ申された、大王よ、あなたは車の何たるかをお解りでいらっしゃる。それと全く同様でございます。大王よ、それがしにつきましても『ナーガセーナ』とは頭髪、爪、齒、皮膚、肉、筋などの各部位に依存し、様態、感受、知覚、表象、認識に依存して、名のみのもので成立する一方で『人格的主体は存在せぬ』という次第であります」